

学 内 広 報

for communication across the UT



- 東京大学創立 130 周年記念式典
& 第 6 回 ホームカミングデー開催！
- 「知のプロムナード」スタート！
- 平成 19 年度 第 1 回 総長賞授与式



2007.11.15

No. 1365

東京大学創立130周年記念式典 &

11月10日(土)、安田講堂にて東京大学創立130周年記念講演および記念式典が挙行されました。当日は、安田講堂に1,100名、講演・式典がモニター同時中継された法文1号館25番教室に600名、計1,700名が列席されました。

午前10時、濱田純一130周年記念事業実施委員長の挨拶に続き、本学出身のノーベル賞受賞者である江崎玲於奈氏、大江健三郎氏、小柴昌俊特別荣誉教授による記念講演が行われました。式典では、小宮山宏総長の式辞に続き、池坊保子文部科学副大臣、許智宏北京大学長、佐々木元学友会副会長がそれぞれ祝辞を述べられました。その後、本学紹介映像および、学生・教職員等からのビデオレター上映が行われ、最後に全員で東京大学の歌「ただ一つ」の斉唱が行われました。

あいにくの雨天にもかかわらず、多くの列席者に恵まれ、華やかな記念式典となりました。



【壇上列席者・来賓】池坊保子文部科学副大臣、許智宏北京大学長、佐々木元学友会副会長、および森巨元総長、吉川弘之元総長、蓮實重彦元総長、佐々木毅前総長

【壇上列席者・本学】小宮山宏総長、岡村定矩理事・副学長、西尾茂文理事・副学長、濱田純一理事・副学長、浅島誠理事・副学長、高橋宏志理事・副学長、山田興一理事、辰野裕一理事、平尾公彦副学長、井上正仁法学政治学研究科長、雨宮慶幸新領域創成科学研究科長、清木元治医科学研究科長、小森田秋夫社会科学研究所長

問い合わせ先：本部総務グループ(内)22011

ノーベル賞受賞者記念講演



江崎玲於奈氏

大江健三郎氏

小柴昌俊氏

渡邊あゆみ氏

「私と東大」と題した記念講演は渡邊あゆみNHKアナウンサーの司会のもと、執り行われました。お三方ともユーモアを交えた語り口で在学中の思い出、本学に対する思いなどを語られ、列席者は皆、興味深そうに聞き入っていました。講演内容は近日中にHPIに掲載されますので、ぜひご一読ください。

<創立130周年記念事業HP> <http://www.130ut.pr.u-tokyo.ac.jp/index.html>

式次第

- 10:00 記念講演
江崎玲於奈氏
大江健三郎氏
小柴昌俊氏
総合司会／渡邊あゆみ氏
- 11:40 記念式典
演奏
開式
式辞 小宮山宏 総長
祝辞 池坊保子 文部科学副大臣
許智宏 北京大学長
佐々木元 学友会副会長
放映「映像でふりかえる
東京大学百三十年」
ビデオレター
斉唱 東京大学の歌「ただ一つ」
- 12:30 閉式
- 12:45 懇親会(会場：山上会館、第2食堂)

東大-イェール・イニシアティブ設立記念式典の開催

東大-イェール・イニシアティブ設立記念式典が、11月2日(金)午後6時からニューヨークのイェール・クラブ・オブ・ニューヨーク・シティにおいて開催されました。イニシアティブは、東京大学がイェール大学の協力を得て日本学のラボラトリーを今秋イェール大学に開設したもので、3人の教員がイニシアティブに常駐します。式典には、東大、イェール、日本大使館・総領事館、在米日系企業、ニューヨーク銀杏会などから、約150人が出席しました。



小宮山東大総長、レビンイェール大学長、榊田Friends of Todai理事長からそれぞれ挨拶があり、加藤駐米大使から祝辞がありました。なお、記念式典に先立って、学術交流協定が両学長によって署名されました。

第五回日中学長会議を開催

11月7日(水)から9日(金)の3日間、ホテルニューオータニ東京にて、「日中大学交流の深化を目指した共通戦略づくり」をテーマに第五回日中学長会議が開催されました。

日本からは、北海道、東北、筑波、東京、東京工業、一橋、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、九州、早稲田、慶応義塾、立命館、中央の各大学の総長・学長等及び日本学術振興会理事長、大学評価・学位授与機構長等、並びに池坊文部科学副大臣等が参加し、中国からは、北京、清華、復旦、上海交通、南京、浙江、西安交通、中国科学技術、吉林、南開、武漢、華中科技、北京航空航天大学、新疆、四川の各大学の校長等及び中国教育部章副部長、駐日中国大使館崔特命全權大使等が参加しました。



第6回ホームカミングデイ開催！



卒業生の祭典であるホームカミングデイが、本郷・駒場の両キャンパスで開催されました。当日はあいにくの天候にもかかわらず、卒業生とご家族やご友人など5,000名を超える来場がありました。映画「不都合な真実」上映や環境シンポジウム、本郷いちよう藝術祭、駒場での樹木をめぐるイベントや選抜学生によるピアノ演奏会など、数多くの興味深いイベントが行われました。

また、多くの同窓会主催のイベントなどが開催され、卒業生ご自身の手で大学の活動に関わる姿勢が感じられました。今回、ご協力いただきました各部局・本部の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。来年のホームカミングデイは、11月15日(土)の開催です。今後とも卒業生との連携について、ご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

問い合わせ先：卒業生グループ (内)21216 伊藤

プレジデント・カウンシル第3回を開催



第3回のプレジデント・カウンシル(PC)は130周年記念式典と時期を合わせ、本郷キャンパスで開催されました。今回は、PCメンバーと各関連部門との連携企画もあわせて実施され、初日の11月8日(木)には、サステナビリティ学連携研究機構との「グローバル サステナビリティを目指して」と、大学院教育学研究科との「高等教育の国際化と東京大学の課題」、の2企画が開かれました。その夜には、日中学長会議との合同レセプションが六本木ヒルズクラブにて、240人の出席者を迎えて盛大に行われました。

9日(金)には、PCの本会議が開催され、国際的な大学間の連携、学生の国際化などが議論され、本学研究者の研究紹介も行われました。午後には、東洋文化研究所との「アジアから問う共生の哲学」と男女共同参画室との「科学技術における女性研究者の活躍促進」が連携企画として開催されました。

第9回東アジア四大学フォーラムを開催

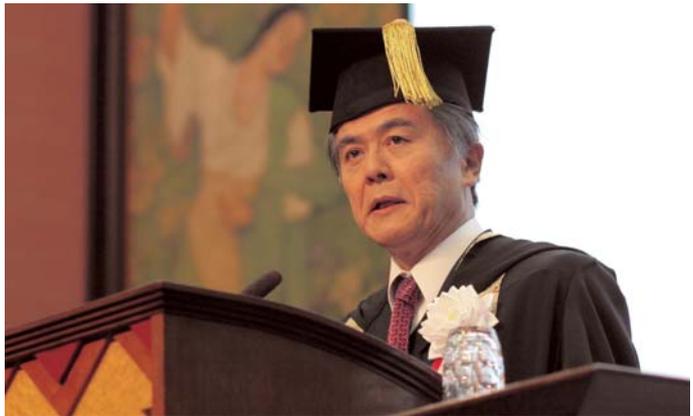
11月11日(日)、12(月)の2日間、本学、北京大学、ソウル大学校及びベトナム国家大学ハノイ校で組織されている「東アジア四大学フォーラム(BESETOHA)」が駒場キャンパスで開催されました。小宮山総長、Xu学長(北京)、Lee総長(ソウル)、Nhuan学長(ベトナム)を始め、四大学の関係教員・学生等約90名が参加しました。今回は「文化の多様性と環境教育」をテーマとして、四大学の各学長による基調講演及び協定調印式が行われた後、「文化の多様性と古典



教育」、「サステナビリティと環境教育」の各セッション、「遠隔授業について」のワーキングセッション、「東アジアにおけるサステナビリティ」に関する講演及び学生パネルが行われ、活発な議論と意見交換が行われました。

東京大学 創立130周年記念式典 総長 式辞

東京大学総長
小宮山 宏



本日、ここに、国内外から多数のご来賓の方々、そして多くの同窓生の皆さまにご列席をいただいておりますことに、心よりお礼を申し上げます。このような形で、東京大学創立130周年記念式典を執り行うことができますことは、誠に光栄であり、ご列席の皆さま方に感謝申し上げます。

本学は、明治10年（1877年）、我が国の近代の幕開けを告げる最初の高等教育機関として創設されました。爾来、25万人に及ぶ有為な人材を社会に送り出し、学術文化の発展の中核を担ってまいりました。

さきほど記念講演を行っていただきました、江崎玲於奈先生、大江健三郎先生、小柴昌俊先生は、いずれも本学をご卒業になった方々であります。本学の卒業生によって、このような、日本のみならず世界の学術文化を代表する顔ぶれの講演会が開催できましたことは、本学ならではのことで、誇りに感じているところでございます。

先生方には厚くお礼を申し上げます。

さて、明治の初期、我が国は、鎖国体制の中でも藩校や寺子屋などによって培われた豊かな教養の基盤の上に、諸外国の技術や社会システムなど、西欧の知識の移入を大胆に行いました。そして、近代国家としての教育理念の確立と、それを基盤とした学術文化の飛躍的な発展によって、現在の地位を得ました。

その中で、東京大学も、今や、世界のリーディング・ユニバーシティの一つとなるまでに発展しております。

これは、130年にわたる本学の長い歴史の中で培われてきた、すぐれた教育研究の蓄積が、広く日本社会に、そして世界に浸透したことの表われと自負いたしております。

とはいえ、そうした伝統に満足するのではなく、本学のあるべき姿は、大学が置かれている、それぞれの時代や社会との関わりの中で、常に問い直していかなければなりません。

東京大学は、平成16年に行われた国立大学法人化を、明治の草創期、戦後改革の時代に次ぐ、「第三の創業」の機会と捉えました。そして、より自由にして、より責任のある立場で、「続ける自覚」と「変える勇気」を持ち、教育・研究を通して知の頂点を目指しつつ、社会にいっそうの貢献を行うことを目指しています。

「続ける自覚」とは、学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界で最高水準の教育・研究を維持・発展させていくことです。

「変える勇気」とは、「時代の先頭に立つ勇気」でもあります。教育システムの改革、グローバル化の推進をはじめ、研究環境の整備や組織運営の革新を先頭に立って実行していこうとする時、模倣すべき手本は、どこにもありません。

それ故、自ら考え、改革・実践していかなければなりません。

私は、昨年11月に開催されたホームカミングデーにおいて、創立130周年を記念し、「時代の先頭に立つ」東京大学に相応しい事業を、多彩に展開していくと宣言いたしました。

こうした事業の中から、これまでに実施したいいくつかを、ここでご紹介申し上げたいと思います。

まず、学生が自ら主体となって企画した学生国際交流サミットががございます。世界各国の学生が東京大学を拠点として集い、議論や意見交換などを行いました。学生交流としては、このほか、野球やレガッタなどのスポーツ国際交流も実施いたしました。

また、各研究科や研究所などの主催による数多くのシンポジウムやフォーラムが、130周年記念事業の旗印の下、本学らしい水準の、また幅広い分野にわたる研究成果を、さまざまな形で社会に発信しております。

東京大学の学問水準の一端を示した、「学問の扉—東京大学は挑戦する—」の出版もいたしました。

これらの記念事業は、すでに、当初宣言し、目標とした130という数を、大きく超えております。



次に、「知のプロムナード」です。

学生や教員がキャンパスの中でくつろいで学問、そして人生を語りあえる空間を整備すべく、各キャンパスに130のポイントの設置を進めています。その一部は、赤門周辺や工学部中庭、医学部本館前など、本日、皆様方にもお立ち寄りいただき、是非、ご覧いただきたい。

国際的な活動としましては、日中学長会議、プレジデント・カウンシル、東アジア四大学フォーラムなど、本学が重要視している国際会議を、この記念式典に前後して順次開催しております。

本日の記念式典には、これらの会議の関係者の方々にもご列席いただいております、心よりお礼を申し上げたいと思います。

また、このたび、イェール大学に日本研究を行うラボラトリーを設置しました。さらには、ラボの開設にあわせて、現地に「NPO法人Friends of Todai」を立ち上げ、米国内における募金などを行う支援活動を開始いたしました。

創立130周年を機会に、この他にも、様々に、東京大学の未来を見据えた事業を企画・実施してまいり所存です。たとえば、留学生寮や外国人研究者用の宿泊施設の拡充、大学での教育に相応しいアクティブ・ラーニングを実践する「理想の教育棟」の建設、学生の奨学金の充実などにも、積極的に取り組んでまいります。

言うまでもなく、これらの事業を実施していくためには、十分な財源が必要です。私どもは、法人化を機に、「東京大学基金」を創設いたしました。この基金から得られる運用益により、本学の学生や教員が教育研究の国際的な競争に勝ち抜ける環境を持続的に提供できるように、育てあげたいと思っております。

この基金には、すでに国内外の多くの篤志家の方々や同窓生の方々にご賛同をいただいておりますが、引き続き、強力なご支援を賜りますよう、この機会にあらためてお願い申し上げます。

また、本日は多数の同窓生の皆様にお越しいただいておりますので、この場を借りて「東京大学学友会」の新しい名称について、ご報告申し上げたいと思います。

「東京大学学友会」は、卒業生の皆様と東京大学の絆を深めるため3年前に創設した同窓会組織ですが、より親しみやすい名称を会員の皆様から広く募集いたしました。ご提案いただいた名称の中から、投票によって、「赤門学友会」という新名称を採用させていただきましたことを、ここでご披露申し上げます。

本日は、ホームカミングデイも合わせて開催しております。

各部局や本部において、さまざまなイベントが企画されておりますので、卒業生の皆様には、そちらの方にもお立ち寄りいただき、旧交を温めていただければと存じます。

本日は、多数の方々にご列席を賜り、このように盛大な式典が挙行できますことに、重ねてお礼を申し上げます。

創立130周年の節目にあたり、東京大学において生み出される「知」が、日本社会に、そして世界の人々にさらなる貢献を行うことができるように、時代の先頭に立って邁進する決意を新たにしたいと思います。

これからも、東京大学に対しまして変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、心からお願いを申し上げまして、式辞といたします。

平成十九年（2007年）十一月十日

文部科学副大臣 祝辞

Remarks at the Celebration of the 130th Anniversary of the University of Tokyo

池坊保子 文部科学副大臣



本日、ここに、東京大学創立130周年記念式典が挙行されるに当たり、一言、お祝いの言葉を申し上げます。

東京大学は、明治10年、我が国で初めて創設された高等教育機関であり、開学以来、教育・研究を通して、多くの有為な人材を社会に送り出し、我が国のみならず、世界の発展に重要な役割を担ってこられました。

また、平成16年の国立大学法人化を、創立期の「第一の創業」、戦後改革の「第二の創業」に次ぐ「第三の創業」と位置づけ、学生支援の充実、教育・研究の活性化、国際交流の推進、産学連携・地域貢献の促進に力を注ぐとともに、経営戦略の確立など法人化のメリットを最大限に活用し、世界のトップユニバーシティに値する活動を世界規模で展開されております。

これまでの幾度もの変革期を乗り越え、東京大学が創立130周年を迎えられましたことは、誠に意義深いことであり、これもひとえに、歴代の総長、各教職員をはじめ関係の皆様のお力と御尽力の賜物と心から敬意を表します。

「知の時代」とも言われるこの21世紀において、我が国が国際社会の中でリーダーシップを発揮し発展していく上で、知的創造と継承を担う拠点として我が国を牽引してこられた東京大学の役割は極めて重要であると考えます。

東京大学は、このことを十分認識され、東京大学憲章の中で「人類普遍の真理と真実を追究し、世界の平和と人類の福祉、人類と自然の共存、安全な環境の創造、諸地域の均衡のとれた持続的な発展、科学技術の進歩などに貢献することを決意する。」と謳われています。

今後とも、東京大学が、活力溢れる大学として、最高水準の知の創造と活用を通して我が国と国際社会に貢献され、「世界の知の頂点」となれることを期待しております。

最後になりますが、本日、御臨席の皆様におかれましても、引き続き、東京大学に対しまして、御指導と御支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、東京大学及び皆様方のますますの御発展を心から祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

平成十九年（2007年）十一月十日

Dr. Xu Zhihong,
President of Peking University



Respected President Komiyama Hiroshi,
Distinguished Guests,
Faculty and Students,

Today, it's my great honor to be here with you to celebrate the 130th Anniversary of the University of Tokyo. Here, on behalf of Peking University, I would like to extend warm congratulations to my friends at the University of Tokyo on your long and distinguished history. In the past 130 years, the University of Tokyo has made remarkable contribution not only to your country and region, also to the world. It fosters a pipeline of graduates, who constitutes the backbone of the nation, in politics, in economy, and in academic professions. And the University with its tens of thousands of faculty, students and alumni, contributes to the development of Asia and other regions, actively engaging in the exploration of solutions to important problems facing all nations and all peoples.

Peking University is proud of its partnership with the University of Tokyo which began in 1985, when we first signed the agreement of academic exchange. But our relations began long before that. Since the early time of the twentieth century, Peking University had faculty members graduated from the University of Tokyo. They brought fresh ideas and scientific attitude to the teaching and research on campus at that time. Today, we have more faculty and students visiting and studying at your institution, working on joint research programs; while we host scholars and students from your university on our campus, to communicate, collaborate, and to harvest. Both groups of exchange personnel will return home, with a better understanding to each other's institution and culture, and greater appreciation of our common humanity. I have faith in the friendship between Peking University and the University of Tokyo, and I look forward to more exchange and collaboration in the years to come.

Lastly, let me extend a special thanks to our host and friend, President Komiyama Hiroshi, for his hospitality in hosting our visits, and for making the University of Tokyo a leading university in the world, seeking academic excellence and willing to take global responsibility, to improve the human life and our environment.

I wish the University of Tokyo a ever-brilliant future.
Thank you!

Nov. 10, 2007

東京大学学友会副会長 祝辞



東京大学学友会
佐々木 元 副会長

この度、東京大学が創立130周年を迎えましたこと、心よりお祝い申し上げます。

諸先輩が多数ご出席のところ、東京大学で学んだ一員として、また東京大学学友会の副会長として祝辞を述べる機会を頂き光栄に存ずる次第であります。

東京大学の学部卒業生数は明治10年（1877年）の創設から累計で約25万人の規模となり、また専攻分野は法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学、教養、教育学、薬学と大きな広がりを見せております。このような状況の下、東京大学は100有余年にわたりわが国の発展に少なからぬ貢献をしてきたものと認識しております。

21世紀に入り、わが国は少子高齢化、資源・エネルギー、地球環境問題等の直面する課題を克服し、科学技術創造立国として国際的な競争力を確保することが急務となっております。

本年6月に我が国の長期戦略指針として閣議決定された「イノベーション25」においても、イノベーションを先導する「知」の源泉としての大学に改革が求められております。

具体的には、

- ・ 研究と教育両面にわたる国際競争力の強化
- ・ 文系、理系の区分にとらわれない教育による幅広い知見や経験の習得
- ・ 意欲と能力の高い学生を選抜するための大学入試の改善
- ・ 世界に開かれた大学づくり
- ・ 「学び直し」のニーズに対応した生涯学習システムの構築

といった内容が示されています。

東京大学を卒業以来、産業界に身をおく立場からは、大学は新しい知を創出し、同時に将来の日本を担う人材を育てて社会に送り出し、産業界は大学の生み出した知をビジネスとして実用化に結びつけ、そのための人材を受け入れるという役割があると考えております。

ところで、産業界に必要な人材は、技術の深さを追求してイノベーションを創り出す人材と、広い視野をもってビジネスを創り出す人材に大別できると思います。産学連携という観点では、大学と企業の研究者が相互に乗り入れる形で研究を行うことにより技術の深さを追求できます。また、視野を広げるための学際的な研究という意味では、文理融合型の共同研究ということが考えられます。私どもでもこのような視点から東京大学の多様な人材とのコラボレーションを通じた研究開発に取り組んでいるところであります。

さて、電気工学科の卒業生としては、近年の若い人の理工系離れを深刻に受け止めています。文部科学省のデータによれば、国立大学の工学部への志願者数は平成13年度の約105,000人から直近の平成19年度には84,000人へと20%減少し、入学者数も約26,000人から25,000人へと4%減少しております。

企業の立場からは、学生にとって魅力のある強い産業を確立し、「ものづくり」が生きがいになるような社会観を作り上げていくことが責務であると考えております。

また企業で求められることは、多様化かつ複雑化する知を融合して価値を産み出すことであります。そういう意味から、大学と産業界と共同で作成した教育プログラムに基づく産業界の講師による実践的な講義を学部学生を対象に設定したり、修士課程の学生に対しては大学における産学連携セミナーや企業内連携ラボにおける共同研究に参加する場を整備することも、将来産業界で活躍できる人材の育成につながるものと考えおります。

このような産学連携を効果的に進める意味においても、各学部・学科の同窓会による交流に加えて東京大学学友会のホットラインやホームカミングデイでの共催イベント等を活用頂き、卒業生と在校生の時代を超えた幅広い人的ネットワークが構築されることを期待しております。

本日は130年という長きにわたる東京大学の歴史を祝うと同時に、この集まりがこれからの東京大学への期待を大いに語り合える場となることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

平成十九年（2007年）十一月十日

「知のプロムナード」スタート！

東京大学創立130周年記念事業「知のプロムナード」が、いよいよ動きだしました。今回の特集では、「知のプロムナード」の整備状況をお知らせします。見慣れたキャンパスの中に、新たな発見があるかもしれません。是非、散策してみてください！



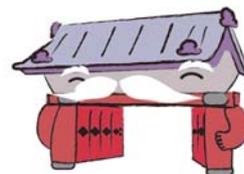
知のプロムナード ナビゲーション・マップ完成！

知のプロムナードの15の道、モニュメント等が一目で分かるナビゲーション・マップが完成しました。知のプロムナードのホームページ上で、ご覧いただけます。

(<http://www.130ut.pr.u-tokyo.ac.jp/promenade/index.html>)

新しく設置されたモニュメントや期間限定で公開される名所はもちろん、今まで何気なく通っていたポイントも、また違った視点で楽しめます。

この特集では、各キャンパスから主な見所をいくつかご紹介します。



番所

赤門の両脇にある、番人の詰め所。来春の3月7日（金）まで、公開される。この機会に是非とも見ておきたい。

公開日：平日10時～16時

（土・日・祝祭日、荒天時は除く）

* 年末年始（12/28～1/6）は公開いたしません。

<本郷>

- 1 博物の道
- 2 情報の道
- 3 歴史と緑の道
- 4 時計台の道
- 5 近代知の道
- 6 医薬の道
- 7 農の道
- 8 遺跡と先端知の道



光電子増倍管

微弱光を捉えることが出来る高感度光検出器。小柴昌俊特別栄誉教授のノーベル物理学賞受賞で、一躍有名に。

知のプロムナードデザインコンペ 表彰式が開催されました！

学内広報No.1355号の特集でもお知らせしました「知のプロムナードデザインコンペーたかがくベンチ>、されどくベンチ>」が実施され、審査の結果、71件の応募の中から入選作10点が決定しました。

10月11日（木）、知のプロムナードデザインコンペ表彰式が行われました。入選作品については、下記のホームページをご覧ください。

(<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/130prome.html>)

多数のご応募、ありがとうございました！



受賞式を終えて

<駒場Ⅰ>

- 9 教養の道
- 10 自然の道
- 11 歴史の道



旧寮遺構のエントランスゲート

駒場Ⅰキャンパス、「歴史の道」の中にひっそりとたたずむいにしへの門。道の名のとおり、歴史を感じさせてくれる。

<駒場Ⅱ>

- 12 空への道
- 13 未来への道



銅像「航空」

駒場Ⅱキャンパスの正門に入り、しばらく進むと見えてくるのは航空研究所にゆかりのある銅像「航空」。なかなか迫力がある。是非、ベンチに座って鑑賞してみよう。

<柏>

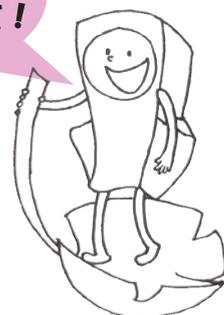
- 14 学融合の道（けやき並木）

けやき並木

柏キャンパスのメインストリートに植えられたけやき。柏キャンパスの一部としてその歴史を刻んでいく。



輝ける未来への飛躍
130年の時空を超えて！



<白金>

- 15 近代医科学の道

近代医科学記念館

白金キャンパスの表門に位置し、人々を「近代医科学の道」へといざなう。知を感じられるモニュメントが多数集まる白金の要所となる建物。



こんなベンチが出来ています！

チェスベンチ (工学部1号館前)

工学部1号館前広場にランダムに配置されているチェスベンチ。ひとつひとつ色や質感が異なるので、自分のお気に入りを見つけるのもいい。



スパイラルベンチ (医学部2号館本館前)

医学部2号館本館前に、大胆に置かれたスパイラルベンチ。人々を和ませてくれるような、個性的な形をしている。



チェスベンチのすぐ近くには、日本初の人口衛星「おおすみ」のモニュメントが。

本年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式が、10月23日（火）17：00より数理科学研究科大講義室（駒場キャンパス）にて開催されました！



受賞者全員との記念写真

学生表彰「東京大学総長賞」は、本学学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、国際交流等の各分野において、「他の学生の範となった」「優れた評価を受けた」「優秀な成績を修めた」などの顕著な功績があった個人又は団体に総長が表彰を行うものであり、平成14年度から実施されています。平成18年度より第1回（秋）は、学業以外の課外活動等を対象に募集を行っています。今回は、個人12件、団体14件の計26件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の慎重な審査の結果、個人2件、団体2件の計4件が受賞者として選出されました。

授与式では、総長から表彰状と記念品が受賞者に贈呈された後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行なわれました。映像を交えながらのプレゼンテーションでは、これまでの活動に関する熱のこもった思いや今後の抱負が語られました。



茂木さん

式次第

奏楽 東京大学音楽部管弦楽団
（平成14年度第2回受賞団体）演奏

《授与式》

- 選考結果報告
- 表彰状及び記念品の授与
- 総長挨拶
- 受賞者プレゼンテーション
- 記念撮影

《懇談会》

懇談
「ただ一つ」斉唱 運動会応援部
（平成14年第1回受賞団体）



セルゲレンさん



乗鞍サマースクール
中村校長



漕艇部クルーからのプレゼンテーション

みなさん
受賞おめでとう
ございました！



総長からの挨拶では、各受賞者の功績への賞賛と今後の活躍への期待の言葉をいただき、受賞者だけでなく参加した学生にとっても様々な活動を促進する良い刺激の場となりました。なお、授与式には、本学学生・教職員等約150名が参加し、受賞者を祝いました。

受賞者紹介

【個人】 2名

ボリジギン・セルゲレン（法学政治学研究科博士課程3年）



中国内モンゴルからの留学生であるセルゲレン氏は、本学大学院に在籍していた2000年に、環境N G O「内モンゴル沙漠化防止植林の会」を設立し、内モンゴルでの植林、草原環境の調査や論文、啓蒙書の執筆、他大学の「環境ボランティア海外実習」科目の指導などを通して、故郷の沙漠化防止の為に国内外で精力的に活動してきた。

中国の生態移民政策（環境保護を大義名分とした文化破壊的強制移住）を日本に初めて紹介するなど、「誰のために植林するのか」という環境保護が孕む問題にも鋭い問いを投げかける同氏の活動は、各種メディアでも繰り返し紹介され、高く評価されている。

（参照URL：<http://www2.newweb.ne.jp/wd/sergelen/desert.html>）

茂木 堯彦（工学部4年）



茂木氏は、本学入学と同時にオリエンテーリングという北欧発祥のスポーツを本格的に開始し、2005年には日本選手権の20歳以下の部門で優勝、同年ジュニア日本代表に選抜され、他大学のメンバーとスイスで行われたジュニア世界選手権に参加した。以来、日本大学生選手権でミドル競技準優勝、翌年のロング競技優勝など非常に優秀な成績を修めている。

また、2006年には日本オリエンテーリング連盟の推薦を受けてユニバーシアード日本代表に選ばれ、スロバキアで開催された国際大会にチーム最年少で出場するなど国内外で活躍をしており、その努力と輝かしい実績は賞賛に値する。

【団体】 2団体

東京大学乗鞍サマースクール



今年で50周年を迎える東京大学乗鞍サマースクールは、1958年に当時教育学部生であった故古田貞夫氏を中心として、衛生教育の実践と研究の場として長野県の旧安曇村立大野川小中学校（現松本市立大野川小中学校）において始められ、演劇、工作、調理、歴史・地理調査などの課題のもとに、交通網が未発達だった往時には山村の子供たちに都市文化伝達の役割を果たしてきた。

その役割は時代とともに変化したものの、現在でも大学生が小中学生に様々な知識・思想を伝えながら交流するという精神を受け継ぎながら、双方に大きな効果を及ぼしている。この50年間に約200人の学生チューターと900人近い子供たちが交流を重ね、地元の人々に対して本学の意義と存在感を高めた功績は大きい。

東京大学運動会漕艇部第85回全日本選手権男子舵手付きペアクルー



日本ボート協会主催全日本選手権大会は、大正9年（1920年）から続く我が国有数の歴史のあるボート競技大会であり、ボート競技の日本一を競う大会である。本学運動会漕艇部はその中心種目エイトで最多の優秀記録を誇っている。しかし、現在の全日本選手権では、強豪実業団チームや運動選手特別入学枠を設けている私立大学に

対して、国立大学勢は苦戦を強いられていた。そのような状況の中で、今回の舵手付きペアクルー（舵手：酒井真利、整調：施 維、舳手：小栗 徳亮）は、並居る強豪を抑え本学として11年ぶりに優勝を勝ち取った功績が高く評価された。

■問い合わせ先：本部学生支援グループ（内）22514 宮内

NEWS

一般ニュース

本部研究推進グループ

独立行政法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA) と連携協力の推進に係る協定書調印式が行われる

10月5日(金)11時から本郷キャンパス理学部1号館小柴ホールにおいて、本学と独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)との間で、連携協力の推進に係る協定調印式が行われました。

本学からは小宮山総長が、宇宙航空研究開発機構(JAXA)からは立川理事長が出席し、調印式に臨みました。既に、両機関の間では、実質的に多くの共同研究、受託研究、人材交流が行われておりますが、この度の連携協力の締結を機に本学大学院における「社会連携講座」の設置および共同運営、ならびに宇宙航空科学技術に関する組織的な共同教育の更なる取り組みが行われることになりました。

また、11月26日(月)9:30~17:25本郷キャンパス安田講堂において本学と宇宙航空研究開発機構(JAXA)は、学際理工学20周年記念公開シンポジウム「宇宙科学と大学」(入場無料・事前申込不要)を行います。



署名した協定書を提示する宇宙航空研究開発機構(JAXA)立川理事長(左)と小宮山総長(右)



固く握手をする宇宙航空研究開発機構(JAXA)立川理事長(左)と小宮山総長(右)



本部学生支援グループ

御殿下記念館 AED 講習会開催される

10月12日(金)に、御殿下記念館スタッフ及び本部学生支援グループ職員等を対象としたAED(自動体外式除細動器)講習会が、本郷消防署員の指導のもと開催された。これは、御殿下記念館へのAED導入を機に本部学生支援グループ主催で開催されたもので、学生スタッフを含め30名が訓練用人形を使ってAEDの使用法と一連の心肺蘇生法(人工呼吸—心臓マッサージ—AED)を実習した。AEDは「だれでも」「簡単に」救急蘇生を実施するための装置ではあるが、実際に使用する場面に遭遇した際に自信をもって操作できるよう、参加者は真剣に講習を受講していた。救命救急等の資格を所持していても、実際にAEDを使用した経験のあるスタッフはおらず、訓練のおかげで落ち着いて操作できそうだと感想であった。また、消防署員からはプール付近での使用時の注意点など運動施設での使用を想定したアドバイスを受けることもでき、有意義な講習会となった。



訓練用人形を使って真剣に講習を受ける様子



消防署員から事前説明を受けるスタッフ一同



サステナビリティ学連携研究機構

東京大学 IR3S・北九州市共催公開シンポジウム 2007 「北九州から東アジアの循環型社会を考える」

東京大学サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）と北九州市は、「循環型社会」をテーマに、10月18日（木）～20日（土）に専門家会合と公開シンポジウムを開催した。

前半の専門家会合では、日本・中国・韓国の大学・研究機関、行政、企業から専門家を招待し、活発な議論が交わされた。



北橋北九州市市長

後半の公開シンポジウムは、東京大学創立130周年記念事業の一環として、「北九州から東アジアの循環型社会を考える」をテーマに行い、多くの市民が参加した。

武内和彦本学 IR3S 副機構長、北橋健治北九州市市長、由田秀人環境省廃棄物リサイクル対策部部長による主催者・来賓挨拶では、それぞれが地球環境問題の深刻さと早急な対策の必要性、中国・韓国・日本による東アジア経済圏の近年の発展と物流の活発化およびそれに伴った廃棄物の輸出入の増大を強調した。また、公害問題を克服し、循環型産業を育成した北九州の貢献の可能性、すなわち地方都市から東アジアに至るまでの循環型社会の形成への貢献可能性についても言及された。

基調講演では、安井至国際連合大学副学長から、国際的なリサイクルを行ううえでの理論的な枠組みの提示が電子機器を例になされた。次に、全炳成韓国環境省資源循環局局长から、韓国の廃棄物管理政策、リサイクルの現状等に関する説明があった。スタンリー・C・T・イップ アラップチャイナ企画開発部部長からは、「エコロジカル・フットプリント」、「統合的資源管理」といった手法を用いつつ、都市計画・設計に際して、資源管理原則を組み込むことが必要であることが指摘された。

次に岡澤和好本学 IR3S 研究員を司会に、細田衛士慶應義塾大学教授、浅野直人福岡大学教授、三隅佳子財団法人アジア女性交流研究フォーラム会長、諸大建中国同済大学教授、呉侏鐘韓国国立環境研究院資源リサイクル室室長の参加によってパネルディスカッションが行われた。



パネル討論

はじめに細田教授、浅野教授からは資源循環、リサイクルに関する日本および東アジアの現状に関する包括的な発言があり、諸教授、呉室長からは、それぞれの国の循環型社会の特徴が紹介された。また、三隅会長からは、北九州市の経験に関する発言もあった。

その後、日中韓で1年に1度程度、リサイクルに関して会議等により情報交換がなされたほうがよいのではないかと、といった提案や、具体的な法整備の必要性など、東アジアの循環型社会の形成に関する本格的な議論がなされた。これに対して三隅会長からは、北九州市が公害問題を克服するに至った合意形成の過程、官民それぞれの役割などが示されるとともに、循環型社会の形成にあたっては個々人の意識が重要であり、その発揚を促すような教育の大切さが指摘された。

学術的な話題にとどまらず、実務家レベルからの話題提供、および北九州市の経験の共有というように全体的に興味深い議論がなされ、今後の東アジア循環型社会形成に向けて、非常に有意義なシンポジウムとなった。



本部キャリアサポートグループ

知の創造的摩擦プロジェクト第5回交流会開催

10月20日（土）駒場Iキャンパスコミュニケーション・プラザ南館において、知の創造的摩擦プロジェクト第5回交流会「駒場を生きる、駒場を活かす」が開催された。

卒業生との交流を通して、学生のキャリア形成支援を目指すこの大学主催のイベントも、一昨年10月の本郷キャンパスでの第1回、昨年の駒場Iキャンパス、本郷キャンパスでの各開催、今年6月の本郷キャンパス開催と続いて第5回目となり、今回は100名近い卒業生と約200名の学生が参加した。



平尾副学長の挨拶

開会にあたり平尾副学長(卒業生室長、キャリアサポート室長)は、創立130周年にあたり全学をあげて卒業生との触れ合いを一層密にと企画している本年に、卒業生が多数参集されたことの意義を称え、各方面において輝きを放つ卒業生は本学の財産でもあるとして謝意を表し、学生には卒業生が多数集まってくれたこの場は知性と感性とを、ともに磨くまたとない機会であると述べ励まされた。第一部グループディスカッション、第二部懇親会の二部構成で13時から19時まで、なごやかに、けれども熱の籠った会話の輪が広がった。



第一部 グループディスカッション



第二部 懇親会

毎回「東京大学三四郎会」と本学学生サークル「東大ドリームネット」の多大なる支援、協力のもとに行われるこの交流会が、学生と卒業生がともに主体的に参画するいわば「東大コミュニティ」ともいべき交流の仕組みの熟成につながる事が期待される。

部局 ニュース

大学院教育学研究科・教育学部
留学生懇談会を開催

6月20日(水)、教育学研究科恒例の留学生懇談会が教育学部内のラウンジで開かれました。出席者は、留学生、日本人学生、教職員あわせて50名と、ラウンジに人があふれる盛況でした。

留学生手作りのお国料理をつまみながらの歓談の他、参加者による楽器演奏(ピアノ、バイオリン、ピッコロ、

さらに薩摩琵琶)や合唱(中国人留学生による)を楽しみました。



ラウンジにて歓談



留学生による合唱

春の懇談会は、新しい留学生を歓迎する意味をこめて毎年行っています。今回も、今年度から教育学研究科で勉強を始めた留学生一人一人に自己紹介をしていただきました。その他、今回は特別に餅つきのイベントもあり、留学生や、腕に覚えの教員も餅つきに挑戦し、つきたての餅を皆でほおぼって、大いに盛り上がりました。



餅つきのイベント

国際・産学共同研究センター



「社会人のためのITS専門講座」
生研千葉実験所にて開催

国際・産学共同研究センター(CCR)主催、先進モビリティ連携研究センター(ITSセンター)と(財)生産技術研究奨励会の共催で2007年度「社会人のためのITS専門講座」が9月20日(木)に生産技術研究所千葉実験所で開催された。本講座は2003年度から進められているCCR産学連携プロジェクト「サステナブルITSプロジェクト」における成果を広く紹介することと、ITS分野の人材育成を目的としている。2004年度の第1回からこれまで年一回、駒場リサーチキャンパスにて開催されており、千葉実験所での開催は今回が初めてとなる。

当日は渡部俊也国際・産学共同研究センター長と池内克史先進モビリティ連携研究センター長の開講挨拶に始まり、午前から夕方にかけて ITS センターのコアメンバーとサポートメンバーによる「ITS 複合現実感交通実験スペースの展開」(本学須田義大教授)、「小型キャパシタ EV でライフスタイルを変えよう！」(本学堀洋一教授)、「サステナブル ITS の展開研究」(本学田中伸治講師)、「車両運動制御のための路面状況計測手法について」(日本大学景山一郎教授)、「WYSIWYAS ナビゲーション実例とそのバックボーンとしてのシステム創成論」(埼玉大学長谷川孝明教授)、「交差点の安全性向上へ向けた記号化の提案」(首都大学東京大口敬教授)の各講義が行われた。須田義大千葉実験所長の閉講挨拶で本講座は終了し、引き続き受講者は前田研究室・須田研究室・岸研究室と海洋工学水槽の4箇所の研究施設を見学した。

本講座には産官学各界から 87 名が出席し、会場となった千葉実験所事務棟 1 階の大会議室は多くの受講者で席が埋まった。講義中は講師の話に熱心に耳を傾け、資料にメモを取る受講者の姿が多く見られた。本講座が ITS の研究開発や ITS を担う人材育成の一助となれば幸いである。



講師の話に熱心に耳を傾ける受講者



講座の会場となった生産技術研究所千葉実験所

大学院総合文化研究科・教養学部

日独共同大学院プログラム (IGK) プログラム創設記念式典・シンポジウム開催される

日本とドイツの双方の大学が協力して大学院博士課程の教育研究を共同で行ない、プログラムに参加する学生が出身大学において博士号を取得することを支援する日独共同大学院プログラム(日本学術振興会、ドイツ研究協会)が開始されました。今後、2010年8月までの期

間、大学院総合文化研究科とマルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学のあいだで集中的な学生・教員の相互派遣を行ない、大学院教育の国際化および国際共同研究の充実に努めます。同プログラムの創設記念式典・シンポジウムを10月11日(木)、12日(金)にドイツのハレ市にて開催しました。式典では、W・ディーペンブロック学長(ハレ大学)、木畑洋一教授(東京大学)、ベルリン日本大使館、日本学術振興会の代表の挨拶に続き、ドイツの有名な歴史家J・コッカ教授の基調講演が行なわれました。翌日のシンポジウムでは、プログラムの共同研究テーマ「市民社会の形態変容」について日独比較の視点から議論を行ないました。日本側からは大貫隆教授、石田勇治教授がパネリストとして講演しました。



日独共同大学院プログラム「市民社会の形態変容」創設記念式典



日独共同大学院プログラム参加学生と教員

また、式典とシンポジウムに先立って開催された共同学生セミナーでは、日本側15名、ドイツ側9名の計24名の学生全員がドイツ語で研究報告(例外的に1名のみ英語)と討論を行ないました。本プログラムの枠内で今後も引き続き実施される共同学生セミナーが、学生の研究水準と学術的コミュニケーション能力の一層の向上に資することに疑いはありません。

日独共同大学院プログラムの詳細については、プログラムのウェブサイト(<http://igk.c.u-tokyo.ac.jp/>)をご覧ください。

(大学院総合文化研究科日独共同大学院プログラム(IGK)運営委員会)

大学院教育学研究科・教育学部

教育学研究科心理教育相談室
創立 50 周年記念イベント、開催される

教育学研究科心理教育相談室が本年で創立 50 周年を迎えることを記念して、10 月 13 日（土）山上会館にて記念イベントが開催された。前半は「若者の引きこもりと就労支援」と題された公開講座であり、精神科医の近藤直司氏と厚生労働省の半田有通氏をお招きして、それぞれのご経験をもとに「引きこもり」の実態と就労支援の実際をお話しいただいたほか、支援の現場から実践例も報告された。聴衆は約 130 名で、お二人の講演の後には、フロアも交えた熱心な質疑応答が行われ、「引きこもり」の問題に対する関心の高さがうかがわれた。



公開講座の一コマ

公開講座終了後引き続いて、約 100 名の参加者とともに 50 周年記念式典が挙行された。浅島誠理事・副学長による祝辞の後、相談室 50 年の歴史がスライドでたどられ、本学名誉教授肥田野直氏、本学元客員教授の越智浩二郎氏、日本女子大学教授飯長喜一郎氏に思い出を語っていただいた。式典の後半では、「これからの臨床活動に向けて—社会とのかかわり」というテーマでシンポジウムが行われた。御登壇いただいたのは、武蔵大学教授の武田信子氏、日本女子大学教授の鶴養美昭氏、東京女子大学教授の高島克子氏、東京学芸大学名誉教授の野村東助氏で、10 年先、20 年先に向けて社会と接点をもちながらどのように心理臨床活動を展開していけばよいか議論された。



祝辞を述べられる浅島誠理事・副学長

夕方には 50 周年記念パーティが行われ、相談室の OB・OG を中心とした約 90 名の出席者でにぎわった。

古い写真などがスライドで紹介されたこともあって話は盛り上がり、出席の方々には閉会の時間まで楽しい時間を過ごしていただけたようである。

先端科学技術研究センター

先端研二十年史完成！

今年、設立二十周年を迎えた先端研の二十年史、『東京大学先端科学技術研究センター二十年史—ある一部局の自省録』がこの 10 月 18 日（木）に刊行されました。同年史は、先端研広報委員長である御厨貴教授を編集委員長に、菅原琢特任准教授以下、二十年史編集室スタッフらによってまとめられたものです。

同編集室はわずか 1 年ほど前に立ち上がりました。文字通りゼロからのスタートで地下に埋もれていた資料を掘り起こし、かつて在籍していた教職員にヒアリングを行い、といった地道な作業を重ねて、A 4 版で 270 ページにもものぼる年史が完成しました。御厨教授の言葉にもありますが、「たかが二十年、されど二十年」。この間、駒場Ⅱキャンパスの様子は大きく変わり、その過程で資料の保管場所が移動したり、また社会全体の流れとして文字データから電子データへと移行した時期にもぶつかり、情報の収集は予想以上に困難でした。さらに、先端研は教員の任期が原則十年と定められているために、設立時から現在まで先端研に所属する人間が一人もいないのも（設立時に助教だった教員が他の部局を経て、教授として先端研に戻ってくるといった場合は除く）、作業が難航した要因となりました。

二十年史は、先端研の前史にあたる航空研究所、理工学研究所、宇宙航空研究所などについて触れた序章に始まり、「組織」「研究」「教育」「広報・交流活動」「キャンパス・建物」の五章で構成されています。また末尾には付録として年表がつけられ、先端研の出来事とともに、社会的なトピックス、さらには科学分野における出来事が一覧できるようになっています。

先端研二十年の時間と、先端研に関った全ての人の思いが、ずっしりとした重さになって伝わってくる二十年史です。





新連載！

ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 第1回～



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。是非、東大ナビをご活用ください！



**東大ナビ
はじまる**

ケータイでお得なイベント情報をGET!
詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!
東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方



東大ナビ はじまりました！

10月より、学内イベント情報サービス「東大ナビ」がスタートしました！10月9日（火）、冬学期開始にあわせてメルマガ刊行、携帯サイトutnav.jpでも学内の様々なイベント情報を発信しています。

同時に学内で広報活動を行い、本郷キャンパス赤門・正門・弥生門・農正門に立て看板、本郷・駒場キャンパスにポスター、また駒場キャンパスではシラバス配布時にハガキサイズのダイレクトメールを配布させて頂きました。見かけた方もおられたのではないのでしょうか。

また大学生協様のご協力により、毎週メルマガ会員様限定クーポンで試供品を配布しています。携帯サイトではハロウィンスイーツ情報などおすすめ情報を配信中です。

皆様の広報活動、イベント情報取得に東大ナビをご活用ください！

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話のみのサービスです



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線：27823（重田）
- メール：info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス：本郷キャンパス 第二本部棟401号室



（左上）ポスター・DMの配布
（上）生協でのメルマガ会員限定試供品配布の様子
適時キャンパスで開催中。メルマガ登録でクーポンをGETして下さい！



INTERVIEW

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
機構長 小池 俊雄 教授 (工学系研究科)

今月ご紹介するのは、地球観測データ統合連携研究機構長、小池俊雄先生です。当機構は2006年4月に発足後、国家基幹技術(※国主導の長期戦略による大規模プロジェクト)「データ統合・解析システム」の実施主体機関として選ばれ、国家的戦略を担った研究・開発を行っています。世界に先駆けて、多種多様なデータを統合し、解析可能なシステムを作ることで、我々の生活と密接な関係にある大規模災害、異常気象、気候変動、食料危機などの問題解決の突破口となることが期待されています。

Q. 機構発足の経緯は?

小池 2000年頃に世界気候研究計画(WCRP)の中で私が提案しました「統合地球水循環強化観測計画」というプロジェクトを喜連川優教授(生研)と柴崎亮介教授(空情セ)の協力を基に始めたのが今の機構の原点となっています。

その後、科学技術振興調整費が連続して採択されたことから、予算にも恵まれて研究が進みました。そして、2005年2月開催の第3回地球観測サミットで地球観測10年実施計画が承認され、国内においても、2004年12月開催の総合科学技術会議において、地球観測推進戦略が総理大臣に提唱されました。これら国内外の決定には、本学も大きな役割を果たし、特に案文の起草には、喜連川・柴崎両教授にご協力を戴きました。このような背景から、国家施策として地球観測データを効果的に使おうというチャレンジが始まったわけです。

また、小宮山総長とお話した際にも、これらの研究は東京大学が世界の中心となって行おうべきとの激励の言葉を戴き、機構発足の運びとなりました。国家基幹技術としての推進はその後決まりました。

Q. 具体的な活動内容は?

小池 活動内容は、大きく分けて四つあります。

一つ目は、大容量の多様なデータを扱えるようにし、最先端のデータベース技術を用いて統合のコアシステムを開発することです。これは、喜連川教授のグループと京都大学、国立情報学研究所が担当しています。二つ目は、多様な異なる分野間で情報を上手く繋ぎ、データを整理していくことです。柴崎教授のグループと慶應義塾大学の担当がしています。三つ目は、完成したシステムにデータを投入していくことです。私と西田修平教授(海洋研)のグループ、宇宙航空研究開発機構と海洋研究開発機構が担当しています。そして四つ目は、社会的・科学的に価値ある情報を作り出すということです。木本昌秀教授(気候セ)と今須良一准教授(気候セ)、鷲谷いづみ教授(農)と溝口勝准教授(農)、沖大幹教授(生研)、および私のグループと、海洋研究開発機構が担当しています。

今までの活動で具体的な利用研究例を挙げますと、例えば洪水災害について、衛星のデータと数値予測モデル、GIS(地理情報システム)の情報、河川、ダム等の管理データを全て統合すると、洪水の予測値が得られるので、河川管理をする側は、ダムの最適操作で下流の洪水を減らしたり、避難勧告や洪水の危険度を評価するリスクマネジメントに利用できます。具体的には、わが国の利根川やベトナムのフォン川で実用化の検討が進んでいます。他に鷲谷先生

総長室総括委員会とは?

近年の学問の急速な発展、法人化後の大学業務の多様化などを背景に、従来のような部局中心の教育研究では変化に対応するのが難しくなってきました。例えば、複数の部局にまたがる領域横断的な教育研究プロジェクトや、総長の強いリーダーシップの下で全学として推進すべき重要プロジェクト、また、大学として一元的に実施する必要がある環境安全などの業務は部局だけではできません。そのため、2004年度に室、本部、機構、ネットワークといった組織を総長室直轄で設置することになりました。総長室総括委員会は、それらの新しい組織をまとめる、全体の教授会のような役割を担っています。

の研究はとてもユニークで、特定外来生物「セイヨウオオマルハナバチ」という蜂の駆除のため、市民の方から蜂発見情報を集め、その情報をデータ化し、Webを通して市民へ配信する双方向システムを構築しています。市民の調査協力を基にした、大観測網ができるわけです。その情報を使って、環境省は駆逐、駆除の計画を立てて、効果的に実施しようとしています。

また、IPCCの第4次評価報告書で用いられた世界26の温暖化予測モデルの出力を木本先生からご紹介戴き、40テラバイトもあるこの出力を喜連川先生のグループにアーカイブして戴き、農業(溝口先生)や水循環(沖先生、私)で他のデータと統合しながら利用するという共同研究も始まっています。

異分野の先生方との連携は、言うのは簡単ですが、行うのは大変難しいのが実情です。私たちは、データベースや空間情報の最先端の研究グループの協力を得て、高度なデータインフラ上で、それを実現しようとしています。その中から、思ってもみなかった、学問的・社会的に有用な科学知が生まれてきていることを実感しています。

Q. 今後の活動、目標は?

小池 2007年12月2～4日に第3回アジア水循環シンポジウムを別府で開催します。ここでは、地球観測サミットの枠組みの下で、地球観測を効果的に用いてアジアの水災害軽減を目指す国際協力プロジェクトを本学が中心となって取りまとめます。また、2008年1月28日～2月1日に第3回WCRP再解析国際会議を生産技術研究所で開催します。これは、気象庁による25年間の長期気象再解析完成を記念して行われるものです。当機構では気象庁と協力し、この再解析を全てアーカイブし、利用研究を進めているところです。

また、2008年度までに1ペタバイトハードディスクアレイ、オンロジックシステムを中心として、オフライン投入データに対応する統合・解析システム(小規模システム)の開発と利用研究に取り組みます。

2009～2010年度は、4～5ペタバイトのテープライブラリを加えた中規模システムを開発し、継続的なオンラインデータ投入の機能の開発を目標としています。

(インタビュー: 鈴木・山縣)

● 関連ホームページ ●

地球観測データ統合連携研究機構
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21387)
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>



「東京大学アントレプレナープラザ」開業記念式典・記念講演会 開催報告

130名を超える参加があった東京大学アントレプレナープラザ開業記念式典・記念講演会



9月26日(水) 山上会館2階大会議室にて、東京大学創立130周年記念事業「東京大学アントレプレナープラザ(以下アントレプラザ)」開業記念式典・記念講演会が開催されました。

記念式典では小宮山宏総長の「東京大学は産学連携を積極的に推進しており、大学発ベンチャーが増えることを期待する」というメッセージに続いて、アントレプラザ建設に多大なご尽力を頂いた(株)成信 代表取締役社長の根本信男様と、鹿島建設(株)様(出席者は常務執行役員 山口皓章様)に、小宮山総長から感謝状と記念品が贈呈され、お二方からそれぞれご挨拶を頂きました。

次に(株)東京証券取引所 執行役員 静正樹様から「これからの大学発ベンチャーに期待すること」と題して記念講演を頂戴しました。その後、藤田隆史産学連携本部長から挨拶があり、各務茂夫産学連携本部事業化推進部長からは、入居企業の紹介に先立って、東京大学におけるベンチャー支援の概要説明がありました。アントレプラザ入居の11社(アドバンスト・ソフトマテリアルズ(株)、(株)バイオマスター、(株)ネクスト21、プロメテック・ソフトウェア(株)、(株)アイプラスプラス、(株)ユーグレナ、(株)ゲノム創薬研究所、(株)セルクロス、日本放射線治療品質保証(株)、(株)ハプロファーマ、(株)モルフォ)から会社紹介のプレゼンテーションが行われ、山田興一理事の閉会の辞をもって終了しました。なお、総会司会は白石敬仁産学連携本部特任准教授でした。

(左上) (株)成信 根本信男社長と小宮山総長、(右上) 鹿島建設(株)山口皓章常務執行役員と小宮山総長、(右中央) (株)東京証券取引所 静正樹 執行役員、(下) 山上会館の式典・講演会参加者

関東地区大学知的財産戦略研修会のお知らせ 東京大学における産学連携の成果と課題

大学知的財産本部整備事業の最終年度にあたる本研修会では、本学の産学連携を支援するために産学連携本部が蓄積してきた経験や、現在の活動、今後に残された課題などを発表する予定です。みなさまのご参加をお待ちしております。

日程: 12月3日(月)

時間: 10:00~17:50 (交流会18:00~20:00)

会場: 丸ビルホール(千代田区丸の内2-4-1 丸ビル7階)

参加費: 無料 (交流会参加費5,000円)

定員: 300人

※事前登録が必要です。以下URLよりお申し込みください

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/200712symposium/>

【研修会内容】

講演「東京大学産学連携体制と成果の総括」「Proprius21(価値創造型産学連携)の試行と成果」「発明届処理の現状と課題」ほか。パネルディスカッション「東京大学における起業・大学発ベンチャー支援」

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携グループ)

電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)

ホームページ: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

小宮山総長との懇話会、盛況に終わる



(上) 懇親会会場となった山上会館1F談話ホール、(下) 懇話会風景

9月26日、東京大学アントレプレナープラザ開業イベントが終了した17時30分より、山上会館1階談話ホールにて、藤田隆史産学連携本部長司会のもと、小宮山宏総長との懇話会が行われました。東京中小企業投資育成(株)代表取締役社長 荒井寿光様に乾杯のご発声を頂いた後歓談となりました。小宮山総長の前には名刺交換のための多数の産業界出席者の列ができました。110名を超える参加者の中には、山田興一理事の中締め挨拶後も熱心に交流を深める方々も多く、懇話会は大盛況のうちに終了しました。



今回は、本年7月に渉外本部に就任された、杉山副理事にご登場いただきました。副理事の力強いリーダーシップの下、今渉外本部では個々の部員が一丸となって東大基金130億円達成に取り組んでおります。

教職員のみなさんへ

杉山 健一
副理事



なぜ教職員が寄附を？

みなさん、東京大学アクション・プラン2007を読まれましたか？ 今、東大は変わりつつあり、これからも更に変わろうとしています。戦略的投資を可能にし、東大の国際的競争力を強化するためには財務基盤の充実が不可欠です。渉外本部では東大基金「東大130」キャンペーンの遂行を通して基金のコアを確立することを目指しています。

基金に対する教職員の皆さんの理解と賛同がキャンペーンの原動力です。そして私たちは外部の卒業生や法人企業の方々に東大基金へのご寄附・ご支援をお願いできるのです。

寄附目標と現在の状況

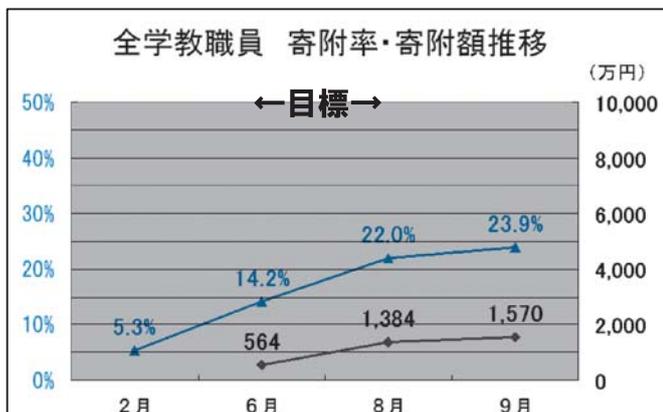
教職員寄附参加率50%以上

→ 寄附額目標、本年度1億円の達成

教職員のみなさんからの寄附目標額は、渉外本部の本年度計画として、1億円と設定されています。過去2年間で約4400万円の寄附実績でしたから、高い目標に挑戦していると言えます。

しかしそれは不可能な目標ではありません。過去の教職員一人当たりの寄附金額で、寄附参加率50%以上が達成できれば、1億円の到達も可能なのです。

9月末現在、教職員のみなさんの累計寄附参加率は23.9%、本年度寄附額は1570万円となっています。



科・所長訪問の実施

渉外本部では、今年の6月から7月にかけて、「東大基金」へのご理解とご協力を求めるため、高橋・山田・西尾の3理事による科所長訪問を初めて実施しました。その結果、寄附参加率は14%から約24%まで上昇しました。

私たちは50%以上の参加率を目指し、9月から10月にかけて、科所長訪問の第2ラウンドを実施しています。各部署の寄附率推移を報告するとともに、私たち渉外本部が各部署の活動で支援できることはないか、お聞きしています。ご要望に応じて、教授会にて基金の説明を行うこともあります。

目標達成に向けて

私たち渉外本部は、今後とも、科所長・基金担当者・事務長のみなさんと連絡を取り合い、各部署の基金活動のお手伝いをさせていただきます。年度末まで、残すところあと5ヶ月。教職員のみなさんの更なるご支援、ご協力をお願いいたします。

教職員寄附額・平均額(累計)

	寄附者数	寄附総額	平均額
役員・教員	723人	5,390万円	74,500円
職員	1,017人	660万円	6,500円

教職員寄附参加率50%（累計）＝1億円（本年度）を目指している、ということは今まで渉外本部として広報しておりませんでしたので、みなさまにとっては、初めて聞かれるメッセージかと思います。

しかし、渉外本部が基金を確立するため、また外部の方々に「内部からも、こんなに基金が必要とされているんですよ」と訴えるためには、教職員自らが基金に参加しているということが重要なのです。

残り5ヶ月となり、ようやく教職員の1/4の方々に基金活動に参加していただきました。これからもみなさまの所へお邪魔させていただきますので、率直なご意見をお気軽にお寄せください。（鈴木）

基金最新情報

6,160件 9,706,685,072円

(内教職員 1,863件)

(10月25日現在申込)

教職員参加率 25.5%

連絡先：渉外本部 鈴木

電話：内線21744(外線03-5841-1744)

HP：<http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>

※「東京大学トップページ」上で「東京大学基金」をクリック

「さすてなTimes」
第2弾!

サステナな日々

～キャンパスから考えるサステナビリティ～

vol. 3

サステナビリティ学を社会へ発信!

現在国連では、日本が提唱した「国連持続可能な開発のための教育の10年」(2005～2014年)をもとに、持続可能な開発の実現に必要な教育への取り組みと国際協力を積極的に推進するよう各国政府に働きかけています。東京大学でも、サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)や地球持続戦略研究ユニシアティブ(TIGS)を中心にサステナビリティ教育が推進されてきました。国内外でのシンポジウムや企業関係者に向けたセミナーなど、今までいろいろなかたちで実践されていますが、今号では最近の新たな取り組みについて、その一部をご紹介します。

小学生にもわかる温暖化の話

未来の地球を担う子どもたちにもサステナビリティについて知ってもらおうということで、チーム・マイナス6%(環境省)と協力し、10月8日(月)に「地球温暖化防止スペシャル・スクール」を安田講堂にて開催しました。このイベントは、小学生に気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の第4次評価報告書のメッセージを正しく伝え、温暖化問題を理解してもらうことを目的とした特別授業です。IPCCといえば先日ゴア前アメリカ副大統領と今年のノーベル平和賞を受賞することが発表されたばかりです。本学からはIR3S教授・TIGS統括ディレクターの住明正教授が参加し、子どもたちにエールを送りました。



地球温暖化は未来に生きる君たちの問題。しかし、不安になる必要はない。人類は、多くの科学的知見を積み重ねてきた。誰もが未経験で、皆が新しい事態に直面している今、大事なことは知識を持って積極的に温暖化問題に立ち向かうこと。今回のスクールで、地球温暖化に関する知識、自分の頭で考える習慣、問題に果敢に取り組む気力、そして皆と楽しく過ごすゆとり、友達の気持ちを考える優しさを身につけてください。

また、開講式の挨拶には鴨下環境大臣が登場。大臣は、石炭や石油の見本などを使って、一人ひとりの行動によって排出されるCO₂の量やCO₂が環境に与える影響について触れた後、今回の授業で学んだことを、是非友達にも伝えて欲しいと呼びかけました。

授業はIPCC第4次評価報告書の各作業部会の内容に準拠したもので、写真や寸劇を用いて子ども向けにわかりやすく説明されました。受講した小学生も終始真剣な表情でメモをとっていました。

なお、この授業の様子は映像学習教材となつてチーム・マイナス6%のサイト上などで公開される予定ですので、詳しくはそちらをご覧ください。



サステナ(サステナビリティ; 持続可能性)とは?

「環境の世紀」と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要キーワード。地球社会を持続可能なものへと導くビジョンを構築するための基礎となる新しい超学的な学術が「サステナビリティ学」(sustainability science)である。

サステナビリティ学連携研究機構(IR3S) HPより
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>

このコラムは、サステナビリティ学をキャンパス、そして個人のライフスタイルへと結びつけることを目指しています。



さかなクンや川合俊一さん(日本ビーチバレーボール連盟会長)も登場しました。

→チーム・マイナス6%ホームページ
<http://www.team-6.jp/>

サステナビリティ学教育プログラム 学生受け入れ開始

サステナブルな社会の実現のために国際的な視野を持って貢献できる人材の育成を目的としたサステナビリティ学教育プログラムが本格的に始動し、10月に第1期生を受け入れました。

このプログラムは、新領域創成科学研究科環境学研究系の5専攻を横断する形式で設置され、TIGS・IR3Sとの連携により、サステナビリティについて幅広く学ぶことができます。また、講義・演習はすべて英語で行われ、修了者には「修士(サステナビリティ学)」が授与されます。

→サステナビリティ学教育プログラムホームページ
http://www.sustainability.k.u-tokyo.ac.jp/index_j.html

北九州でサステナを考える

北九州市というとき皆さんはどのようなイメージをお持ちですか?石炭と鉄の工業都市=公害のイメージ?でもそれはもう過去のこと。公害問題を克服し、その経験を活かして積極的に環境問題に取り組み、いまやその成果は世界的にも認められる環境都市なのです。また大陸に近いという利点を活かし、アジア諸国との交流も活発な国際都市でもあります。IR3Sではその北九州市と連携をして、北九州市の地において「循環型社会」をテーマに、専門家会合と公開シンポジウムを開催しました(10月18日～20日)。

前半の専門家会合では、日本・中国・韓国の大学・研究機関、行政、企業から専門家を招待し、活発な議論を行いました。また、世界的にも有名な北九州エコタウンへ足をのばし、市と企業一体の取組みの現場を視察しました。

最終日の公開シンポジウムでは、基調講演・パネル討論を通じて、循環型社会をめぐる各国の状況報告や将来に向けた提言を行いました。「北九州市から東アジアの循環型社会を考える」一固めのテーマにもかかわらず多くの市民の皆さんが集まりました。これは市の取り組みが住民にも浸透して、地域住民の環境問題に対する意識が高いことの現れでしょう。北九州市で開催する意味を体感しました。

大学が地域と連携してこうしたイベントを企画実施することは、これまであまり例がなかったのではないのでしょうか。循環型社会の形成を含めサステナビリティの問題は、研究者・大学だけで解決できる問題ではありません。行政、企業、地域、住民、また国際的にも連携して、協働して取り組んでいかなければいけない課題です。一連のイベントを終え、新たな一步を踏み出したという感想を持って帰京しました。(本部研究機構等支援グループ・手塚)

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ(内線21387)



黒田玲子

総合文化研究科 教授
科学技術インタープリター養成プログラム代表

3期生を迎えて

科学技術インタープリター養成コースも、この10月に3期生を迎えることができた。このプログラムが10月開講なのは、海外と同調した秋に新学年を始める体制をとっているからではない。このプログラムの重要なポイントの一つである、東大の修士・博士課程院生を対象とした「副専攻」の位置づけに理由がある。まず、自分の本専攻をしっかりと把握したうえで応募し、選抜を経て受講していただきたいからである。本専攻の研究がうまくいかないの、社会と科学技術の関係に力を注ぐというのは好ましくない。本専攻の指導教員から推薦状をいただき、本専攻の研究能力とインタープリターとしての能力の両方を5段階で評価していただいているのもそのためである。落ちこぼれの意識を持ってこの活動に参加するのではなく、世界トップの研究をやりながらも、社会の中の科学の位置づけをしっかりと把握していただきたいと思うからである。東大のプログラムのキーワードは、「何を伝えるか、どう伝えるか」である。一般の人や子供たちに最先端の科学を分かりやすく伝えることも重要であるが、科学の本質を知り、社会と科学の関係を理解し、科学的ものの考え方ができ、社会から学ぶ姿勢も大切である。最近、食の安全を脅かす事件が報道されている。ある会社が産地を偽り偽包品を売っていたのは、まさにブランド品のハンドバッグなどと同じことが食品にも起きている証であり、何らかの対策が必要になっていくだろう。賞味期限をごまかした会社のことも話題になっている。信頼を裏切られたと糾弾するのが大方のマスコミの論調である。嘘について消費者をだまし不当な利益を上げていたことは許せないが、「では賞味期限とは何か？どのようにして誰が決めているのか？」と考えることも必要であろう。賞味期限の切れる10分前は問題ないのに、10分後に突然腐るわけでもない。連続した事柄に、線引きをしなくてはいけないのが、規則や法律である。消費者は何を望んでいるのか？どのような情報が消費者には必要なのか？そんなことも考えられる人たちに、研究者、博物館の学芸員、官僚、政治家、ジャーナリスト、教師などとして社会の多くのフロンティアでリーダーとして活躍していただきたいと思っている。

『このコースは大変だけれど、やりがいがある』というのが、1期生の感想である。3期生を迎え、教員もまた、気持ちを新たにしているところである。

★科学技術インタープリター養成プログラム

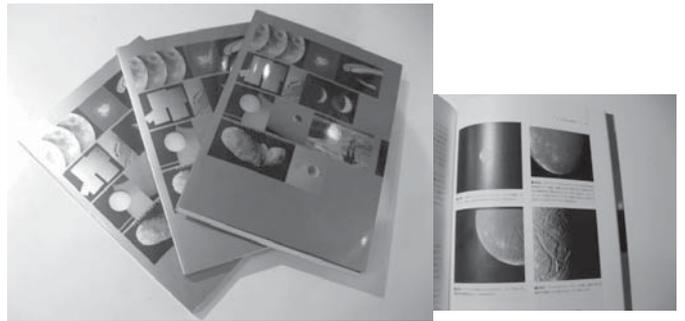
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

コミュニケーションセンターだより No.41

■新商品のご紹介

現在総合研究博物館で行われております「異星の踏査」の図録をコミュニケーションセンターにて販売しております。博物館では、世界第一線の研究を行っている研究者の解説とともに、火星や小惑星の姿を圧倒的な解像度で公開しています。是非、実物をご覧になり、異星の実体を感じて頂いた上で図録を手にとられてみてはいかがでしょうか。

* 展示期間は2007. 10. 20~12. 26までです。



■ 「異星の踏査」 ● 価格：2,500円(税込)

■御酒古酒11/1(木)より発売開始!!

コミュニケーションセンターも3年目を迎え、一緒に時を刻んできました「御酒」の古酒がついに発売になりました！130周年記念限定ボトルです。桐の箱に入ったとても素敵なデザインに仕上がっております。是非皆様で、コミュニケーションセンターにいらして下さい。



瑞泉「御酒」

沖縄戦前黒麹菌使用

130周年記念
熟成古酒「御酒」

内容量：720ml
価格：21,000円(税込)

(担当：コミュニケーションセンター 吉岡)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp/>

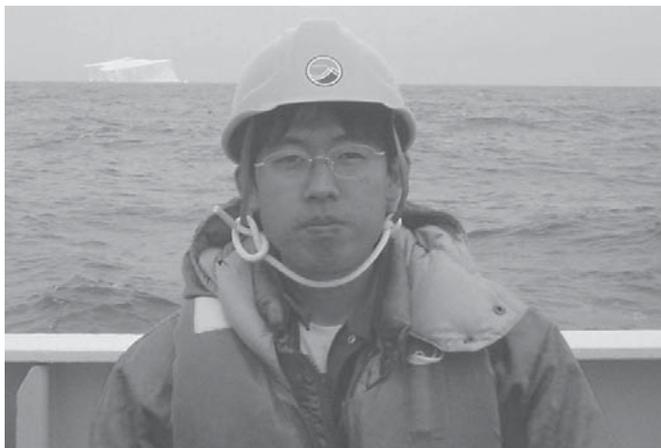
ワタシのオシゴト / 第21回

Rings around the UT

海洋研究所 観測研究企画室 技術班

石垣秀雄さん

乗船業務の満足感



氷山を見ることができ感激しました

私の所属する技術班は共同利用の白鳳丸および淡青丸研究航海を企画運営する観測研究企画室の中で、主に観測機器の整備・改良・開発を担当しています。また、研究航海に乗船し、研究者へ海洋観測および試料採取のための技術提供を行う乗船業務を行っております。乗船業務は我々観測研究企画室にとって現場対応の最も花形的仕事であります。その分、大変な一面は当然あります。例えば、観測機器のトラブルが発生したら昼夜を問わず即座に対応しなければなりません。さらに、貴重な観測時間の欠損を出来る限り少なくするように迅速な行動も要求されます。

私が海洋研究所に採用されてから3年半が経ち、初年度に経験したひどい船酔いから解放されましたが、航海によっては不規則な生活を強いられとても大変な時もあります。しかしながら、自分の提供する技術によってその研究航海が成功することに満足感を持っています。



ソフトボールのライト打ちは難しいです

得意ワザ:①プライベート:ライト打ち(野球) ②仕事:うっかり

自分の性格:のんき

次回執筆者のご指名:八木健夫さん

次回執筆者との関係:時々、白鳳丸で逢う同期

一言紹介:女性よりも男性からの方が人気があるようです!

学内広報
発行スケジュール

学内広報は本年9月より月に1回のペースで発行されることになりました。

月刊化にともない、EVENT LISTはなくなりました。今後はホームページ・ポータルサイトをご活用ください。

今後、INFORMATION記事ご寄稿の際には、記事上の開催日・切等が当該号配布日以降であることをご確認のうえ、お送りください。また、即時性を要求されるINFORMATION記事に関しましては、ホームページ・ポータルサイトをご活用ください。

2007年度後半の学内広報発行スケジュール

号数	原稿締切日 (原則第1月曜日)	発行日	配付日
1364	10月1日 (月)	10月15日 (月)	10月19日 (金)
1365	10月29日 (月)	11月15日 (木)	11月21日 (水)
1366	学生生活実態調査特集号(予定)		
1367	12月3日 (月)	12月14日 (金)	12月20日 (木)
1368	1月9日 (水)	1月24日 (木)	1月30日 (水)
1369	2月4日 (月)	2月18日 (月)	2月22日 (金)
1370	セクシュアル・ハラスメント アンケート結果 特集号(予定)		
1371	3月3日 (月)	3月14日 (金)	3月21日 (金)

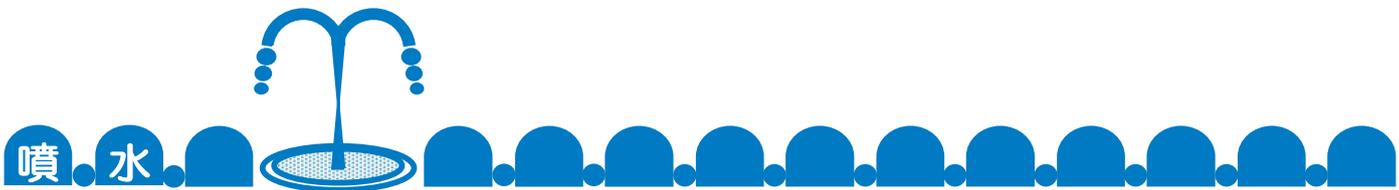
※1月は連休があるため、締切日を第2水曜日とします。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→
【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先:
本部広報グループ 広報企画チーム
TEL:03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



教育学部附属中等教育学校の生徒が 高校生福祉文化賞に入賞

第5回高校生福祉文化賞エッセイコンテスト（日本福祉大学、朝日新聞社主催、応募作品数9673点）の「わたしが暮らすまち」分野において、本校6年の脇本佑紀君が、審査員特別賞を受賞した。

脇本君は家の近くにある、現在は使われていない給水塔をととても気に入っていた。しかし、久しぶりに通ると給水塔は取り壊されていた。変わることは発展であって、不必要なものは取り除かなければいけないかもしれないが、そのようなものでも残して欲しいと思い、そうした思い出は、心の帰る場所であることを文章にした。

「もともとその時の心の動きを衝動的に綴ったものなので、受賞の知らせを聞いたときは驚き、嬉しくなった。賞をもらったということよりも、自分の思いが自分の文章で審査員の方に伝わったということが嬉しかった」と受賞した感想を述べてくれた。

また、「感じる」「伝える」ということは、あらゆることにおいて、どちらが欠けてもいけない大切な力であること。そして、東大附属の独特なカリキュラムの中で、一般的な科目はもとより、「日本の神話」「福祉」「自然」など多様なものに触れることで「感じる力」を養えたこと。さらに、それら一つひとつについて調査した結果をまとめ文章にすることで、「伝える力」を養うことができたと話してくれた。



受賞した6年の脇本佑紀君

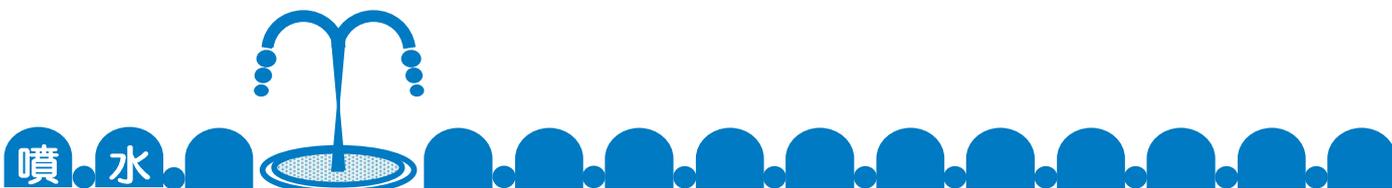
海洋研究所と教育学部附属中等教育学校 ソフトボールの試合で交流を深める

10月2日（火）に海洋研究所と教育学部附属中等教育学校が本校グラウンドにおいてソフトボールの試合を行った。1試合目には海洋研究所が4本のホームランで6-0の圧勝。2試合目には附属学校の打線がつながり9-5で勝って、1勝1敗であった。夜には海洋研究所で懇親会も行われて、交流を深めた。

この会は毎年この時期に行われ、10年以上も続いているものである。この2つの施設は中野キャンパスで隣接している施設である。海洋研究所の方々が休み時間に本校のプールやグラウンドを利用して運動をしたり、逆に本校が理科実験の機材を貸して頂いたりなどの交流は普段からある。3年前には海洋研究所の先生方に中学生・高校生に向けて授業をしてほしいと本校が申し入れて、それ以後授業が毎年行われている。どの講義も生徒たちは好奇心を刺激されて、意欲的に受講している。



試合の様子



第31回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が 開催される

恒例の東京大学伊豆・戸田マラソン大会が、10月28日（日）に開催された。コースは、静岡県西伊豆の東京大学戸田寮（沼津市戸田地区）を基点とする42.195kmのフルマラソンコース、西浦市民窓口横を基点とする21kmのハーフマラソンコースで、標高差500mの山道を含むなど通常に比べかなりの難関ではあるが、日本有数の景勝地として知られる西伊豆の自然を体感しつつ走ることができ、参加者から例年好評を博している。



スタート地点から臨む富士山

大会前日の選手集合時には季節外れの台風に見舞われ大会の開催自体が危ぶまれたが、大会当日は台風一過の雲ひとつない晴天にくっきりと浮かび上がった日本一の富士山が見守る中、総勢93名（教職員17名、卒業生13名、沼津市民4名等を含む）が出走した。結果、個人総合の部では、大学院生の片岡哲朗（かたおか・てつろう）さんが、第26回大会（平成13年度）から5連覇中だった卒業生の大井寛己（おおい・ひろき）さんを破り2時間45分32秒のタイムで、ハーフマラソンは、篠原聡（しのはら・さとし）さんが1時間23分13秒のタイムで、また団体の部では、卒業生を中心としたチーム名「飛走会」が優勝した。なお、その他の出走者も好走し、91名がこの難コースを完走した。また、大会終了後に行われた閉会式には、ご後援をいただいている沼津市から斎藤市長にもご出席いただき、沼津市長杯の授与、挨拶をされ、本学関係者と地元との好い交流の機会となった。

来年もコース沿道での地元の方々、通過する車からの温かい声援に後押しされながら秋の西伊豆路を周回する伊豆・戸田マラソンへ皆さんの奮ってのご参加をお待ちしています。



フルマラソンスタート風景 ハーフマラソンスタート風景

主な成績は以下のとおり。

第31回東京大学伊豆・戸田マラソン大会結果

【個人の部】＜東京大学総長杯＞

順位	氏名	時間	備考
優勝	片岡 哲朗	2:45:32	農・大学院生
準優勝	大井 寛己	2:56:38	卒業生
第3位	伊東 聖	2:59:40	卒業生
第4位	二平 泰典	3:01:12	農・学部生
第5位	貴田 大樹	3:06:23	農・学部生
第6位	津釜 大侑	3:13:57	農・学部生

【団体の部】＜沼津市長杯＞ (上位3位の平均順位が少ないチーム)

順位	チーム名	平均順位	備考
優勝	飛走会	6.7	卒業生
準優勝	Doo-Up 本命 リターンズ	7	学部生・卒業生
第3位	インナーロー	11	学部生・卒業生

【女子の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	大田原 由紀子	4:21:22	農・学部生

【学内の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	片岡 哲朗	2:45:32	農・大学院生

【バカヤロー会長杯】（第一補給所～ゴール間で一番順位を上げたので第47位の方）

順位	氏名	時間	備考
第47位	樺沢 明子	4:45:51	農・教員

【ハーフマラソンの部】（男子の部）

順位	氏名	時間	備考
優勝	篠原 聡	1:23:13	卒業生
準優勝	岩崎 恭行	1:56:36	卒業生
第3位	佐々木 博	1:56:44	職員

【ハーフマラソンの部】（女子の部）

順位	氏名	時間	備考
第1位	篠原 美穂	2:13:57	職員

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

生物生産工学研究センター

東京大学創立 130 周年記念事業・東京大学
シンポジウム「環境生命科学における微生物・
植物バイオテクノロジーの最先端」

本年度のシンポジウムは、本センターが重要な研究課題と位置づけている、「微生物・植物バイオテクノロジーによる環境修復・保全や食糧をはじめとする有用物質生産」をキーワードに、国内外の第一線の研究者を演者として迎え、最近のトピックスを紹介するとともに、現在様々な生命科学分野でますます重要さが増してきた研究手法であり、当該研究分野にも活用が期待されているバイオインフォマティクスについても、その最先端研究を紹介し、今後の研究の方向性等について討論します。

日時：12月5日（水）13:00～18:30

12月6日（木）9:00～19:00

場所：本学弥生講堂（文京区弥生 1-1-1）

参加費：無料 登録：不要 使用言語：英語

照会先：生物生産工学研究センター 葛山智久

TEL: 03-5841-3073 FAX: 03-5841-8030

E-mail: utkuz@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/biotec-res-ctr/>

講演者

小宮山 宏（本学総長）

別府 輝彦（日大）

海老塚 豊（院薬学）

西山 真（生物生産工学研究センター）

福田 雅夫（長岡技術科大）

野尻 秀昭（生物生産工学研究センター）

清水 昌（京大院）

西田 洋巳（アグリバイオ）

板谷 光泰（慶大）

佐々木卓二（農水省生物研）

西川 建（前橋工科大）

小笠原直毅（奈良先端大）

佐藤 忍（筑波大）

馬 建鋒（岡山大）

藤原 徹（生物生産工学研究センター）

小柳津 広志（生物生産工学研究センター）

廣近 洋彦（農水省生物研）

山根 久和（生物生産工学研究センター）

Bradley S. Moore (UC San Diego, USA)

Juan L. Ramos (Consejo Superior de Investigaciones Cientificas, Spain)

Edward Buckler (Cornell University, USA)

Ziheng Yang (University of College London, UK)

William J. Lucas (UC Davis, USA)

John Turner (University of East Anglia, UK)

シンポジウム・講演会

大学総合教育研究センター

国際フォーラム「寄付募集を通じた大学の財務基盤の強化」開催のお知らせ

大学総合教育研究センター（以下、大総センター）は、昨年9月より、野村證券との共同研究プロジェクト「大学の財務基盤の強化に関する共同研究」を行っており、このたび、カリフォルニア大学バークレー校の寄付募集責任者、デビット・ブラインダー氏をお招きし、国際フォーラムを開催いたします。

東大・野村大学経営フォーラム

「寄付募集を通じた大学の財務基盤の強化」

日時：12月7日（金）13:30～

場所：鉄門記念講堂（本郷キャンパス）

プログラム（敬称略）

13:00 開場

13:30 開会の挨拶

小宮山宏（本学総長）

古賀信行（野村證券株式会社執行役社長兼 CEO）

13:45 インタロダクション「大学の財務基盤の強化と寄付の活用」

片山英治（大総センター共同研究員 / 野村證券法人企画部主任研究員）

14:00 基調講演「アメリカの大学経営における寄付募集の活用」（仮題）

デビッド・ブラインダー（カリフォルニア大学バークレー校アソシエート・バイスチャancellor）

14:40 研究報告「日本の大学における寄付募集の現状と課題：アンケートの集計結果から」

両角亜希子（大総センター助教）

15:10 休憩

15:30 パネルディスカッション「日本の大学の財務基盤の強化に向けた寄付の活用方策を探る」

デビッド・ブラインダー(カリフォルニア大学バークレー校アソシエイト・バイスチャンセルラー)／國澤隆雄(大阪医科大学理事長)／金子元久(大学院教育学研究科長)／両角亜希子

<司会>

小林雅之(大総センター教授)／片山英治

17:00 Q&A セッション

17:25 クロージング 岡本和夫(大総センター長)

18:00 レセプション

ブラインダー氏略歴

ブラインダー氏は、1987年から1995年までプリンストン大学の寄付募集での手腕が認められ、1995年からはウェズリー大学の寄付担当副学長をつとめました。ウェズリーでは、寄付キャンペーンで7年間に4億7200万ドルというリベラルアーツ大学で史上最高額の寄付募集の実績をあげており、この分野でとても著名なマネージャーです。2007年8月からは、母校であるカリフォルニア大学バークレー校の寄付募集責任者となり、早くもこの9月にはWilliam & Flora Hewlett財団から1億3300万ドルとバークレー史上最高の寄付を獲得しました。当日はいかに寄付を集めるかといった技術論のみならず、大学の財務にとっての寄付募集の必要性、戦略的計画や予算における位置づけという広い観点からお話いただきます。

問い合わせ・申し込み

FAX: 03-5802-3372 E-mail: forum@he.u-tokyo.ac.jp
氏名、ふりがな、所属、電話番号、メールアドレス、レセプション参加の有無を明記してください。

<http://www.he.u-tokyo.ac.jp/>

シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部

東京大学創立130周年記念事業 理学系研究科
スペクトル化学研究センターシンポジウム「最先端サイエンス：進化するスペクトル科学」

理学系研究科附属スペクトル化学研究センターでは、本学のスペクトル科学の発展と学内ネットワーク交流に資することを目的に、東京大学創立130周年記念事業の一環として下記のとおりシンポジウムを開催いたします。このシンポジウムでは、学内各部局から一流の講師をお招きし、自然科学の広範な分野で進化し続けている最先端の「スペクトル科学」についてご講演いただきます。

日時：12月21日(金) 10:15～17:25

場所：理学部化学本館5階講堂

主催：理学系研究科附属スペクトル化学研究センター

参加費：無料

プログラム(敬称略)：

10:15～10:20

「開会の辞」岩澤 康裕(スペクトル化学研究センター長)

10:20～11:00

「放射光小角X線散乱法を用いたソフトマテリアルのナノ構造研究」雨宮 慶幸(新領域創成科学研究科長)

11:00～11:40

「軟X線発光分光による、水、溶液、タンパク質の電子状態の研究」辛 埴(物性研)

11:40～13:00 昼食休憩

13:00～13:40

「走査トンネル顕微鏡を用いた表面分光」

川合 真紀(新領域)

13:40～14:20

「放射光を用いたナノ領域のスペクトロスコピー」

尾嶋 正治(工学系)

14:20～15:00

「放射光が明かす超伝導・磁性のメカニズム」

藤森 淳(理学系/新領域)

15:00～15:20 コーヒーブレイク

15:20～16:00

「スペクトル分析でみる星の形成」山本 智(理学系)

16:00～16:40

「超高速分光法が解き明かす化学反応のようす」

岩田 耕一(スペクトル化学研究センター)

16:40～17:20

「時間と空間を分解したラマン分光で観た生細胞のダイナミズム」濱口 宏夫(理学系化学専攻長)

17:20～17:25

「閉会の辞」濱口 宏夫(理学系化学専攻長)

連絡先：岩田 耕一(スペクトル化学研究センター)

E-mail: iwata@chem.s.u-tokyo.ac.jp

スペクトル化学研究センターホームページ

<http://utsc2.chem.s.u-tokyo.ac.jp/~spectrum/indexj.html>

シンポジウム・講演会

環境安全研究センター

第17回東京大学環境安全研究センターシンポジウム
「水環境の保全と水質の制御」

環境安全研究センターでは、主に一般の方々を対象に、環境と安全に関する研究や事例を本学の研究者から紹介することを目的として、毎年、環境安全研究センターシンポジウムを開催しております。今年は「水環境の保全と水質の制御」をテーマといたしました。水に関連する問題は、水資源としての量および分布、周辺の景観や熱環境の形成など、様々な視点がありますが、本シンポジ

ウムでは特に水質に焦点を絞り、その制御のための施策や技術、自然環境での水質形成のメカニズムについて、本学の5名の研究者が研究発表をします。多くの方のご来場をお待ちしております。

日時：12月25日（火）13:15～17:00（開場 12:45）

場所：弥生講堂・一条ホール

内容：

開会挨拶 尾張真則（環境安全研究センター長）

挨拶・特別講演 岡村定矩（理事・副学長）

「水環境保全のための排出権取引」

花木啓祐（大学院工学系研究科 教授）

「超臨界水酸化反応による有害廃水処理」

大島義人（大学院新領域創成科学研究科 教授）

「エアロゾルの水環境への影響」

竹川暢之（先端科学技術研究センター 准教授）

「閉鎖性水域での物質循環と微生物」

浦川秀敏（海洋研究所 准教授）

「都市の雨と水環境」

中島典之（環境安全研究センター 准教授）

参加費：無料

参加申込：往復葉書又はメールにて、住所・氏名（返信用葉書にも）・電話番号・職業をご記入の上、12月11日（火）までに以下の宛先までお申込み下さい。当日参加も可能ですが、資料準備の都合上、事前申込みにご協力をお願いいたします。

問合せ・参加申込先：環境安全研究センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

E-mail：escsympo@esc.u-tokyo.ac.jp

<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/>

お知らせ

お知らせ

サステナビリティ学連携研究機構

東京大学 IR3S ニューデリー研究拠点 (IR3S New Delhi Research Unit, The University of Tokyo) の開設

7月9日（月）に東京大学インドオフィスがニューデリーに設立され、9月より本格的な活動を開始しています。開設されたインドオフィスは、東京大学 IR3S ニューデリー研究拠点 (IR3S New Delhi Research Unit, The University of Tokyo) という名称で、東京大学サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) がグローバル・サステナビリティを追求する上でインドの重要性に鑑み、現地オフィスとして設立したものであります。

本オフィスはインドにおける拠点として、当面の間はサステナビリティに関してインドを代表する大学や

研究機関との研究協力の推進や情報収集を中心に活動を行なう予定です。そのような方針により、本オフィスは、インドエネルギー・資源研究所 (The Energy and Resource Institute: TERI) 内に設置され、IR3S より特任研究員を派遣しています。



MOUの締結をする TIGS 統括ディレクター住明正教授と TERI エグゼクティブディレクターのスリバスタバ氏

また、本オフィスは全学的な観点で設置されたものでもあることから、インドにおける大学・研究機関の動向等の情報収集、これら大学・研究機関との協力関係の構築および強化のためのリエゾンの業務など、今後の全学的拠点としての展開も視野に入れつつ、体制および機能強化を図っていく予定です。

この度、本研究拠点のホームページを立ち上げましたので、是非ご覧下さい。

The IR3S New Delhi Research Unit (INDRU) website:

<http://www2.ir3s.u-tokyo.ac.jp/indru/>

また、12月5日（水）・6日（木）には、現地にてエネルギー問題をテーマにしたキックオフミーティングを開催する予定です。その様子についても、随時ホームページ等でご報告していきます。

【本件に関するお問合せ】

担当：本部研究機構等支援グループ（蔭山・手塚）

内線：21387

E-mail：kikoushien@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第505（10月10日）号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。第505号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

植田一博：オープンキャンパス2007

駒場での実施について

黒瀧正憲（日本棋院・七段）：全学体験ゼミナール「囲碁で養う考える力」を教える

石井洋二郎：鉛筆の書き込み——図書館という書物の森
村越隆之：東大生の身体意識

〈本の棚〉

林文代：田尻芳樹著『Samuel Beckett and the Prosthetic Body : The Organs and Senses in Modernism』
恒川恵市：内山融著『小泉政権——「パトスの首相」は何を変えたのか』 秀逸な日本政治分析

〈時に沿って〉

桜井英治：夏の思い出
高橋 聡：変わるものと変わらないもの
星埜守之：専門は一応「フランス文学」
外村 大：「新入生気分」を脱して

第3回 駒場キャンパス技術発表会 開催のお知らせ
第3回 室内楽演奏会
第112回 オルガン演奏会

お知らせ

気候システム研究センター

一般公開講座「二酸化炭素のゆくえ」開催のお知らせ

本学気候システム研究センターでは11月29日(木)14:30～17:30、伊藤忠商事との共催で一般公開講座「二酸化炭素のゆくえ」を開きます。今回は、日本における気候の第一線の研究者たちが、温暖化の原因にもなっている二酸化炭素がどのように循環しているか、また、今後の増加の見通しはどうかについて分かりやすく講演と解説を行います。この講座に参加して、気候への興味をより一層深めませんか。

■ 日時：11月29日(木) 14:30～17:30

■ 会場：安田講堂

■ プログラム：

開会 14:30～14:40

気候システム研究センター長・教授／中島映至

第1部「講演会」14:40～16:10

気候システム研究センター准教授／今須良一

「二酸化炭素を宇宙から測る」

気候システム研究センター准教授／羽角博康

「海と気候と二酸化炭素」

電力中央研究所／丸山康樹

「二酸化炭素削減とその効果」

第2部「パネルディスカッション」16:30～17:30

パネリスト：中島映至、今須良一、羽角博康、丸山康樹、鈴木祥一（伊藤忠商事）

■ 参加費：無料 ■ 定員：500人

■ 申し込み：

(1) ウェブページから 11月28日(水)までに以下のウェブサイトへアクセスし、必要事項を入力して下さい。

<http://www.ccsr.u-tokyo.ac.jp/~k-koza/index.html>

(2) FAXにて 11月26日(月)までに以下の宛先に、住所、氏名、所属、役職、電話番号、FAX番号、メールアドレスを書いて FAXでお送り下さい。FAX番号：04-7136-4375（一般公開講座「二酸化炭素のゆくえ」係）

(3) 往復はがきにて 往復はがきの返信部分に住所、氏名、所属、役職、電話番号、メールアドレスを記入し、下記の宛先まで郵送して下さい（11月26日(月)必着）。

〒277-8568 千葉県柏市柏の葉5-1-5 総合研究棟204号室
一般公開講座「二酸化炭素のゆくえ」係

※会場の都合により、定員に達した時点で申し込みを終了させていただきます。お早めの申し込みを。

※お知らせ頂く個人情報は、本件に関する諸連絡以外には使用しません。ただし、今後CCSRが主催するイベントの情報を送らせて頂く場合があります。

■ 問い合わせ：電話04-7136-4374

（気候システム研究センター秘書室・茂谷）

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

イアエステ 国際インターンシップ報告セミナー'07開催のお知らせ

イアエステ関東支部は、下記の通り、国際インターンシップ報告セミナー'07を開催します。この会はイアエステを介して海外インターンシップを行った学生によるインターンシップの報告会です。イアエステ(IAESTE)は、工・理・農・薬学系学生を中心に国際インターンシップを推進している組織です。世界約80カ国に国内委員会を持ち、1948年に発足して以来、ヨーロッパを中心に活動を続けています。ユネスコ等を諮問団体として、世界で4,000社に及ぶ企業・大学の後援のもと、これまでに延べ30万人近い学生を交換してきました。イアエステ理事校のひとつである本学は、東京大学イアエステ委員会が学内委員会として対応し、活発な派遣および受け入れの国際交流を推進しています。理系で国際インターンシップに興味がある方は、実際に派遣を経験したOB・OGのお話も聞くことのできる良い機会ですので、是非お気軽に足をお運びください。



派遣生OB、OGによる研修報告（昨年度）

日時：12月1日（土）12:00～16:00

場所：工学部2号館3階 電気系会議室1A～C

内容：

- ① イアエステ・プログラムの説明
- ② 基調講演：社会人から見たイアエステ・インターンシップ
- ③ 派遣生OB・OGによる研修報告
- ④ 茶話会

上記②では以前イアエステ・インターンシップを行い、現在は就職して社会人として活躍している方を招いて、社会人の視点からイアエステインターンシップについて講演して頂く予定です。

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

12月は、テーマ別ガイダンス「電子ジャーナルを利用するには？コース」（日本語・英語）を開催します。新しいサービス“東京大学学術論文横断検索（UT Article Search）”や“UT Article Link”を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法もご紹介しますので、ぜひご参加ください。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
（定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。）

●コース概要とスケジュール：

■電子ジャーナルを利用するには？（60分）

- ・12/4（火）15:00～16:00
- ・12/12（水）11:00～12:00

電子ジャーナルにアクセスする方法や、代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。同じ内容で2回開催します。

< Database User Training (English Session) >

■Electronic Journals Course (60 minutes)

12/7（Fri.）16:00-17:00

This course covers the fundamental aspects involved when consulting electronic journals.

You will also learn how to access e-journals directly from the search results by using the "UT Article Search" and "UT Article Link" functions.

No advance reservation is required.

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

●問い合わせ：学術情報リテラシー係

03-5841-2649（内線：22649）literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点

Nanobio Tokyo 2007 ナノバイオ・インテグレーション研究拠点成果発表会開催のお知らせ

東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点は、検出・診断・治療が一体化した未来型のナノ医療体系の構築とナノバイオに立脚した新たな環境・情報産業の創出を目指して、2005年8月に発足しました。プロジェクト期間5年のうち、2年が経過し、ナノマシン、ナノバイオセンシング、セルセラピーの3つのサブグループ内での研究をはじめ、グループ間、また外部機関との共同研究も進み、着実に成果を結びつつあります。

今回の成果報告会では前半活動成果の発表と意見交換を通して、プロジェクト後半に向けての更なる研究の進捗を図ります。多くの方に研究活動をご覧いただきたく一般公開としました。この機会にぜひ当研究拠点の活動の一端をご覧ください

—概要とお申し込み—

- (1) 日時：12月14日（金）10:00～18:35
- (2) 場所：医学部教育研究棟14階
鉄門記念講堂（本郷キャンパス）
- (3) 構成：口頭発表 CNBI 課題研究代表者ポスター発表
- (4) 参加費：無料 どなたでもご参加いただけます。
懇親会 カボ・ペリカーノ
18:50～ 5,000円（当日）

- (5) お申し込み：ホームページ上の申込書をメールでお送りいただくか、ファックスでお申し込みください。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/whatsnew/071214seika.html>

E-mail：cnbi_info@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

F A X：03-5841-1510

お問い合わせ：

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点
事務局（担当・長沢）

TEL：03-5841-8446 FAX：03-5841-1510

E-mail：cnbi_info@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1

工学部3号館2階 251A号室

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/>

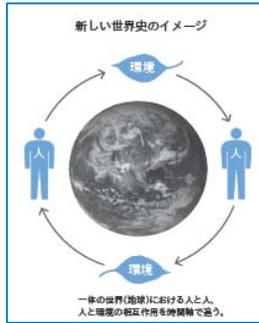
東京大学環境報告書2007が出来上がりました！

今年も環境報告書が完成しました。ここでは、その内容について大まかにご説明します。学内の皆さん、ぜひ、実際に手にとって、読んでみてください。

今年の報告書は、昨年の皆様からのご意見を踏まえ、一層充実した内容を目指して作成しました。

昨年の報告書のアンケートで、特に印象に残った項目として、研究の紹介を挙げている方が多く、その点を踏まえ、今年度のキーワードを「サステナビリティ（Sustainability）持続可能性」とし、キーワードに関連した多種多様な教育・研究を取り上げました。

一般に環境問題対応というと理工学の活動が中心となりますが、本報告書では太陽電池の開発からサンゴ礁の再生、環境と人間や社会との関係に注目した新しい世界史、柏・駒場での環境教育の紹介など多岐に渡った教育・研究を紹介しています。



新しい世界史のイメージ
(環境と人間の関わりを重視した新しい世界史の叙述方法の研究より)



マジュロの海岸(水没する環礁州島の再生についての研究より)

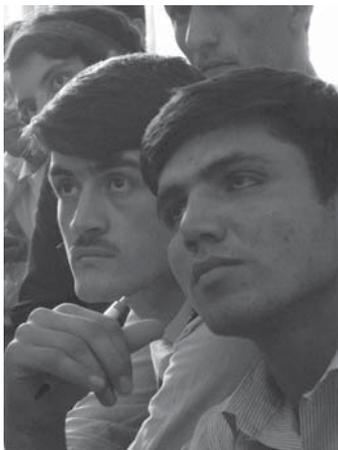


破壊されたままの付属病院

また、東京大学医学教育国際協力研究センターでは、国際協力でいうところのサステナビリティを考え、今ある医療技術を次世代へと持続させる試みを行っています。

本センターは、国際協力機構（JICA）と協力して2003年からアフガニスタンの医学教育の改善のため、国際支援を行っています。本学の教員は、カブール医科大学に何回も出向いて、ワークショップや教員教育を行っています。これは、現地の医師を育てるためには東京で教育するよりも、現地で教育することが重要であるとの考えからです。

大きな目標は、カブール医科大学において、総合医を育成するための近代的システムを作り上げ、アフガニスタンの他の医科大学に普及させることです。



カブール医科大学生

私たちの子孫が健やかに過ごせる地球を守り育むために、「今、何ができるのか、何をすべきなのか」が問われています。「サステナビリティ（Sustainability）持続可能性」というテーマで作成した今年度の環境報告書を通して、本学に係わる全ての方々が環境意識を高め、自発的な行動につながるきっかけになれば幸いです。

アンケートのお願い

今年度も昨年度同様、皆様のご意見、ご感想をいただきたく、アンケート用紙を配布させていただいております。今後の環境報告書の充実を図るため、皆様の率直なご意見・ご感想をお待ちしております。

問い合わせ先: 本部環境安全グループ 安全推進チーム
Tel: 内線21052 FAX: 内線21053 E-mail: utreport@adm.u-tokyo.ac.jp

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
19.10.31	SEKIMORI GAYNOR MEREDITH	任期満了（東洋文化研究所国際学術交流室特任教員）	東洋文化研究所准教授
（採 用）			
19.10.16	堀江 英明	人工物工学研究センター准教授	
19.10.16	松尾 豊	大学院工学系研究科附属総合研究機構准教授（出向）	独立行政法人産業技術総合研究所情報技術研究部門知的コンテンツグループ研究員
19.11.1	山下 恭弘	大学院理学系研究科准教授	独立行政法人科学技術振興機構グループリーダー
（昇 任）			
19.10.16	片山 浩之	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
19.10.16	栗栖 太	大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター准教授	大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター講師
19.10.16	CAMPBELL ROBERT BRIAN	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
19.11.1	飯本 武志	環境安全本部准教授	環境安全本部助教
19.11.1	中川 英刀	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター助教
19.11.1	道田 豊	海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター教授	海洋研究所附属海洋科学国際共同研究センター准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

定方 正毅 名誉教授

本学名誉教授定方正毅先生は、本年9月の北海道・札幌での化学工学会中に倒れられ、平成19年9月25日にご逝去されました。享年63歳でした。



先生は、昭和19年5月13日に東京でお生まれになり、東京学芸大学附属高等学校を経て、昭和42年に本学工学部化学工学科を卒業されました。同年4月本学大学院工学系研究科化学工学専攻修士課程に進まれ、昭和44年3月に同修士課程を修了、同年4月に博士課程に進学されました。昭和47年6月に同博士課程を満期退学された後、同年7月より本学工学部の助手として採用されました。昭和48年3月には工学博士の称号を授与され、同年8月から昭和49年11月までは英国のSheffield大学化学工学科にて研究に従事されました。昭和55年11月に本学工学部の講師に昇任、そして昭和56年4月には群馬大学工学部の助教授として採用され、昭和63年には同大学の教授へと昇任されました。その後、平成2年7月に工学部の教授として本学に戻り、研究・教育活動にご尽力されました。平成17年3月に定年退職され、東京大学名誉教授の称号が授与されました。平成17年4月から引き続き、工学院大学教授としてお勤めになり、研究・教育にあたられました。また、中国清華大学で客員教授を務められたほか、九州大学、群馬大学、豊橋技術科学大学などで非常勤講師としても教鞭を執られました。

先生のご専門は、化学工学、燃焼工学、環境工学であります。学位論文「Jetによる再循環流と乱流の流体力学的研究」においては、燃焼工学の研究に力が注がれました。その後燃焼研究を通じて環境の研究に従事されるようになり、特に本学教授になられてからは、「途上国を対象とした環境保全と経済発展を同時に実

現させるためのKey Technologyの開発」に力点をおかれ、環境問題を取り扱った幅広い研究活動を展開され、日本の環境研究に大きく貢献されました。

特に、燃焼研究を通じてラジカル反応の重要性に着目され、新しい「ラジカル反応工学」構築のための研究に従事されました。酸素負イオンに関する研究では、新規材料を利用した環境分野や産業界への応用を目指した先駆的な研究をなされています。一方で、中国の環境問題解決のための研究にも長年尽力され、新規脱硫技術の開発のための研究に中国清華大学と共同で取り組まれました。さらに、中国東北部・北部に広がるアルカリ土壌の問題に対して、大気汚染との同時解決手法の確立を目指して、脱硫の際の副生物である石膏を用いての土壌改良を提案され、実際に大規模圃場での改良効果が継続的に確認されるという画期的な研究成果を残されました。この中国での環境研究については、著書『中国で環境問題にとりくむ(岩波新書)』にまとめられています。近年では、国内の環境問題、とりわけ日本・世界各地の沿岸海域で問題となっている「磯焼け」の修復に取り組まれ、工業副生物とバイオマスを使った対策技術を用いられ、大きな成果をあげられています。

これら長年の研究活動の成果に対して、昭和55年4月に化学工学協会(現化学工学会)論文賞、平成4年3月に谷川熱技術振興基金粉生熱技術振興賞、平成11年3月に化学工学会研究賞、また同年10月には日本燃焼学会賞、さらに平成13年2月には日本エネルギー学会賞が授与されています。また先生は、学会活動においても、化学工学会では理事や環境部会部会長を始めとした要職、日本エネルギー学会においても理事や燃焼部会部会長などを歴任され、幅広いご活躍をなされました。

いつも学生の成長を心から喜ばれ、大きな心で常に暖かな励ましを送って下さった先生のご逝去は哀惜の念に堪えません。温厚で飾らない人柄で、教職員にもいつもにこやかに接してこられた先生の面影をしのびつつ、ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

【訂正記事】

学内広報において、一部誤りがありましたので、訂正いたします。
関係者および読者の皆様にはお詫び申し上げます。

No.1359 (2007.6.13)

15 ページ 表 2-2

(下記の表のように訂正。ブルーの網掛け部分が訂正箇所)

表 2-2 平成 18 年度修士課程・専門職学位課程修了者の産業別就職者数

平成 19 年 5 月 1 日現在

[単位：人]

産業別	研究科別	人文社会系	教育学	法学政治学		経済学	総合文化	理学系	工学系		農学生命科学	医学系		薬学系	数理科学	新領域創成科学	情報理工学系	学際情報	*公共政策学	合計	比率 (%)
				総合法政	*法曹養成				工学系	*原子力		医科学	保健学								
農・林・漁業										3 (1)										3 (1)	0.2 (0.3)
鉱業								1	5	1 (1)										7 (2)	0.4 (0.3)
建設業								1	47 (7)	5 (3)										59 (11)	3.4 (3.3)
製造業	2 (1)				3 (1)	31 (15)	71 (11)	327 (24)	1	85 (25)			2 (1)	26 (13)	1	102 (13)	56 (6)	4 (2)	5 (1)	716 (113)	40.8 (33.7)
電気・ガス・熱供給・水道業		1 (1)				1	1	29 (5)	7							7				46 (6)	2.6 (1.8)
情報通信業	8 (2)	2 (1)				2	5 (1)	24 (6)	47 (2)	22 (7)			2		5	35 (5)	49 (3)	9 (2)	7 (4)	217 (33)	12.4 (9.9)
運輸業						1	2	2 (1)	29 (6)	1			1 (1)			8	1	1		46 (8)	2.6 (2.4)
卸売・小売業	1 (1)					2	2	17	6 (1)				1			8 (2)	1		1	40 (4)	2.3 (1.2)
金融・保険業				1		14 (6)	5 (1)	21 (1)	49 (7)	10 (4)			2 (1)	11	25 (6)	18	3		16 (7)	175 (33)	10.0 (9.9)
不動産業								1	6 (1)	2 (1)						3			2	14 (2)	0.8 (0.6)
飲食店・宿泊業								1		1 (1)									1	3 (1)	0.2 (0.3)
医療・福祉					1	2 (1)						1 (1)	1 (1)							5 (4)	0.3 (1.2)
教育・学習支援業	4 (2)	12 (2)	2 (1)	5		3	3 (1)	7 (4)		7 (1)		1 (1)		4	2			1	51 (4)	2.9 (4.2)	
複合サービス事業					4 (1)		1	21	2	2 (1)				2 (2)		3				35 (4)	2.0 (1.2)
サービス業	4 (1)	12 (7)				21 (7)	18 (6)	45 (7)	1	16 (4)	1 (1)	1	2 (2)		34 (9)	7		11 (5)	15 (5)	188 (64)	10.7 (9.1)
公務	5 (4)	1			3	3 (1)	11 (1)	36 (4)	1	21 (6)		3 (2)	5 (2)	1 (1)	10 (3)	5 (1)			25 (7)	130 (32)	7.4 (9.6)
上記以外のもの						2 (1)		12 (1)	3						1	4 (2)				22 (4)	1.3 (1.2)
合計		24 (11)	28 (11)	3 (1)	5	28 (8)	77 (38)	158 (27)	677 (68)	15	182 (58)	1 (1)	12 (6)	39 (21)	23 (1)	247 (41)	137 (10)	29 (9)	72 (24)	1,757 (335)	100 (90)

注：() 内数字は、内数で女子。*は専門職学位課程

17 ページ 表 4

(下記の表のように訂正。ブルーの網掛け部分が訂正箇所)

表 4 学部卒業生及び大学院修了者の産業別就職者数の推移 (平 16 年度～平 18 年度)

[単位：人]

産業別	学部	平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
		人数	内数	女子	人数	内数	女子	人数	内数	女子
農・林・漁業	学部									
	修士・専門職学位	1			1			3	(1)	
鉱業	学部				2	(1)		5		
	修士・専門職学位	2	(1)		6			7	(1)	
建設業	学部	15	(2)		13	(1)		13	(3)	
	修士・専門職学位	28	(5)		43	(5)		59	(11)	
製造業	学部	144	(21)		139	(34)		153	(33)	
	修士・専門職学位	593	(132)		661	(122)		716	(113)	
電気・ガス・熱供給・水道業	学部	83	(14)		126	(23)		151	(27)	
	修士・専門職学位	14	(2)		21	(5)		21	(4)	
情報通信業	学部	29	(2)		73	(6)		46	(6)	
	修士・専門職学位	1			7	(1)		1		
運輸業	学部	117	(28)		147	(50)		159	(46)	
	修士・専門職学位	162	(25)		189	(47)		217	(33)	
卸売・小売業	学部	16	(2)		22	(7)		24		
	修士・専門職学位	32	(6)		33	(9)		38	(4)	
金融・保険業	学部	33	(1)		31	(2)		46	(8)	
	修士・専門職学位	2			1					
不動産業	学部	41	(10)		54	(15)		66	(21)	
	修士・専門職学位	34	(2)		38	(7)		40	(4)	
飲食店・宿泊業	学部	1	(1)		3			6	(3)	
	修士・専門職学位	190	(35)		233	(52)		280	(54)	
医療・福祉	学部	86	(9)		150	(19)		175	(33)	
	修士・専門職学位	1			6			13	(2)	
教育・学習支援業	学部	21	(3)		15	(2)		15	(2)	
	修士・専門職学位	6	(5)		6	(2)		14	(2)	
複合サービス事業	学部	2	(1)		3	(1)		2	(1)	
	修士・専門職学位							3	(1)	
サービス業	学部	8	(4)		4	(2)		2	(2)	
	修士・専門職学位	6	(3)		8	(5)		5	(4)	
公務	学部	84	(19)		95	(32)		72	(28)	
	修士・専門職学位	23	(5)		15	(4)		21	(8)	
上記以外のもの	学部	30	(9)		42	(16)		51	(14)	
	修士・専門職学位	175	(35)		168	(55)		163	(45)	
合計	学部	2	(1)		2	(1)		2		
	修士・専門職学位	17	(2)		28	(4)		35	(4)	
サービス業	学部	1			3			7	(1)	
	修士・専門職学位	130	(31)		155	(25)		182	(57)	
公務	学部	122	(32)		159	(46)		188	(64)	
	修士・専門職学位	112	(33)		122	(37)		90	(24)	
上記以外のもの	学部	171	(41)		162	(30)		137	(34)	
	修士・専門職学位	123	(27)		104	(26)		130	(32)	
合計	学部	21	(2)		12	(4)		24	(3)	
	修士・専門職学位	40	(7)		71	(21)		24	(6)	
上記以外のもの	学部	108	(24)		46	(13)		22	(4)	
	修士・専門職学位	34	(5)		57	(10)		10	(2)	
合計	学部	948	(196)		1,069	(233)		1,120	(275)	
	修士・専門職学位	1,380	(279)		1,585	(320)		1,757	(335)	
合計	学部	537	(111)		631	(108)		567	(136)	
	修士・専門職学位									

注：() 内数字は、内数で女子

Contents

特集

- 02 東京大学創立 130 周年記念式典 & 第 6 回ホーム
カミングデイ開催!
- 08 「知のプロムナード」スタート!
- 10 平成 19 年度第 1 回総長賞授与式

NEWS

一般ニュース

- 12 本部研究推進グループ
独立行政法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA) と
連携協力の推進に係る協定書調印式が行われる
- 12 本部学生支援グループ
御殿下記念館 AED 講習会開催される
- 13 サステナビリティ学連携研究機構
東京大学 IR3S・北九州市共催公開シンポジウム
2007「北九州から東アジアの循環型社会を考える」
- 13 本部キャリアサポートグループ
知の創造的摩擦プロジェクト第 5 回交流会開催

部局ニュース

- 14 大学院教育学研究科・教育学部
留学生懇談会を開催
- 14 国際・産学共同研究センター
「社会人のための ITS 専門講座」生研千葉実験所
にて開催
- 15 大学院総合文化研究科・教養学部
日独共同大学院プログラム (IGK)
プログラム創設記念式典・シンポジウム開催される
- 16 大学院教育学研究科・教育学部
教育学研究科心理教育相談室創立 50 周年記念
イベント、開催される
- 16 先端科学技術研究センター
先端研二十年史完成!

コラム

- 17 新連載 ケータイからみた東大
～東大ナビ通信 第 1 回～
- 18 発掘! 総長室総括委員会
～東大に生まれる新組織たち～ 第 3 回
- 19 Crossroad ～産学連携本部だより～ vol.24
- 20 Step by Step 東大基金通信 第 7 回
- 21 サステナな日々
～キャンパスから考えるサステナビリティ～ vol.3
- 22 インタープリターズ・バイブル vol.11
- 22 コミュニケーションセンターだより No.41
- 23 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第 21 回
- 23 学内広報発行スケジュール
- 24 噴水 教育学部附属中等教育学校の生徒が高校
生福祉文化賞に入賞
- 24 噴水 海洋研究所と教育学部附属中等教育学校、
ソフトボールの試合で交流を深める
- 25 噴水 第 31 回東京大学伊豆・戸田マラソン大
会が開催される

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 26 生物生産工学研究センター
東京大学創立 130 周年記念事業・東京大学シンポ
ジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオ
テクノロジーの最先端」
- 26 大学院総合文化研究センター
国際フォーラム「寄付募集を通じた大学の財務
基盤の強化」開催のお知らせ
- 27 大学院理学系研究科・理学部
東京大学創立 130 周年記念事業 理学系研究科
スペクトル化学研究センターシンポジウム「最
先端サイエンス：進化するスペクトル科学」
- 27 環境安全研究センター
第 17 回東京大学環境安全研究センターシンポ
ジウム「水環境の保全と水質の制御」

お知らせ

- 28 サステナビリティ学連携研究機構
東京大学 IR3S ニューデリー研究拠点 (IR3S
New Delhi Research Unit, The University of
Tokyo) の開設
- 28 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 505 (10 月 10 日) 号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 29 気候システム研究センター
一般公開講座「二酸化炭素のゆくえ」開催の
お知らせ
- 29 大学院工学系研究科・工学部
エアステ 国際インターンシップ報告セミナー
'07 開催のお知らせ
- 30 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 30 ナノバイオ・インテグレーション研究拠点
Nanobio Tokyo 2007 ナノバイオ・インテグレ
ーション研究拠点成果発表会開催のお知らせ

31 巻末特別記事

東京大学環境報告書 2007 が出来上がりました!

32 人事異動 (教員)

33 訃報 定方正毅名誉教授

34 訂正記事

淡青評論

- 36 調和と議論：英国と日本の研究風土

◆表紙写真◆

東京大学創立 130 周年記念
式典の様子。全員で東京大学
の歌「ただ一つ」を斉唱

編集後記

特集トップに掲載したノーベル賞受賞者講演は、とても暖かみのある良い講演でした。ユーモラスな語り口にそれぞれのお人柄が表れ、同時に、人生の年輪を感じさせる一言も印象的でした。ぜひ、130 周年記念事業 HP でご一読ください。(し)



七徳堂鬼瓦

調和と議論：英国と日本の研究風土

3年まえに英国・国立テキストマイニングセンター (NaCTeM: <http://www.nactem.ac.uk/>) の所長を頼まれ、マンチェスター大学に向くことが多くなった。12年前に、UMIST (University Manchester Institute for Science and Technology) の教授を辞して本学に着任して以来、10年を経て、再び、英国での研究生活を体験している。2つの国の研究者と同時並行的に接しているわけで、どうしても、彼我の違いが目に行く。最初に目につくのが言語能力。英語中心の科学技術分野では、日本の研究者にとって、このハンディキャップは大きい。もう一つ

は、研究目標の設定と論理の組み立て方。これも言語能力に関係しているが、すこし説明が必要だろう。

英国には、英語を母国語としない研究者、留学生も多い。かれらと比べて、日本の研究者の英語力が劣るわけではない。むしろ、研究背景を共有しない研究者を相手に、前提から結論までを筋道立てて説得する論理的な構成力、あるいは、相手の議論を認めて、それを自らの論理の中に組み込んでいく能力といったものに、差があるように見える。議論に対する積極性が、上の2つ目の差に関係している。

英国で議論していると、その攻撃性にうんざりすることがある。自らのアイデアと既存のものとの差を、(私からみると)必要以上に強調する。逆に、日本の研究者は、相手と自分のアイデアとの共通性を見つけて、差の議論よりも同調する方向に向かう。学生のとことから、差は顕著にある。指導教員の考えを理解して、その方向で研究を組み立てようとする日本の学生に対して、彼の地の学生は、教員を説得する議論を組み立てようとする。

議論の繰り返しで研究の実質が進展しない英国のグループを見ていると、どちらの態度が生産的かは、一概には言えない。ただ、個人と集団とを対立させ、集団の中で議論を繰り返してアイデアを研ぎ澄ます彼らのやり方が、アイデアの結晶化を促し、集団の外の、より広い科学者のコミュニティに対して、強い発信力を持つことは確かである。ディベートの能力ということであろうが、学生の教育、研究グループの組織化の方法など、もっと広範囲な考慮が必要だと思う。研究会を研究打ち合わせ会ではなく、戦いの場にすることから始めようと思っている。

辻井 潤一 (大学院情報理工学系研究科)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

No.1365 2007年11月15日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報グループ
TEL : 03-3811-3393
e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。